

令和2年度
参観者 感想集

七ヶ浜町教育委員会

【七ヶ浜町立亦楽小学校】 授業 I うなばら2組 Lin Rebecca Yang Xi(T1)

長沼 勝則 高野 久美子 (T2)

令和2年11月12日(木) 「好きな食べ物～ランチメニューを作ろう～」

No.	参観者	団体	感想
1	教諭 千葉 淑美	松ヶ浜小学校	<ul style="list-style-type: none">・グループ作りの工夫が上手くいって、どの児童もその子のよさを発揮できていました。・リズムに合わせて、単語を発音する活動は全員積極的に活動していました。・特別支援学級での英語の取り扱いについて、コミュニケーションの育成に役立つ場の設定ができる教科だと感じました。・お店や参形式は、食べ物・動物・クリスマスツリー・パフェ作りなどいろいろな単語で児童が意欲的に取り組めそうだと思います。・絵カードなどの準備だけでなく、児童一人一人の看取りや、指導者同士のコミュニケーションや協力、話し合いなどご苦労がたくさんあったかと思えます。それに答えるだけの児童の様子にとっても成果や児童の成長、これまでの積み重ねを感じました。ありがとうございました。
2	教諭 長沼 勝則	亦楽小学校	<ul style="list-style-type: none">・英語活動を明るく楽しくおもしろく行うには、活動の内容はともかく、日頃のクラスの雰囲気大切である。特別支援の子供たちは、障害はいろいろであるが、日頃から仲良く活動したり、協力したりすることができているので、英語活動の中でもその雰囲気で活動に取り組むことができている。・グリーティングタイムのときにALTとの会話のやりとりが1往復で終わることなく、「Why?」やセカンドクエスチョンでさらに往復することができていることがよいと思う。・今回のアクティビティは「ランチメニュー作り」であったが、子供たちは「作りたい」という気持ちから、店役の教員と進んで英語でコミュニケーションをとって、ランチメニュー作りを行うことができた。今後もアクティビティの内容を検討していき、進んでやりたくなる内容、やらされ感のあるものではなく必要感のあるもの、いつの間にか英語を話してしまうものを考えていきたい。・グループを作って、グループごとに話し合いをさせて活動させたことにより、上学年の子供が下学年の子供を優しくフォローする様子が見られた。英語活動の楽しい雰囲気が、ソーシャルスキルの学習につながる様子が見られた。・活動の最後に希望者が自分の「Dream Lunch」を発表したが、せっかく発表して並べたカードを次の子供の発表のためにすぐ外していたので、小さなプレートなどを用意して比較させるなどして、掲示の仕方を工夫したい。

3	教諭 高野久美子	亦楽小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援のクラスが多く、担任も多いので、様々な取り組みができる恵まれた状況で授業が行えたことが良かった。また、高学年と低学年とに分けてレベルに合わせた取り組みができることも良かった。高学年が低学年の補助をしている様子も見られて、この姿を今後も継続できればと思いました。 ・同じ町内でも学校の実情によって（特に特別支援について）取り組み方も異なることを感じた。個々の障害に合わせた特支で英語Cは難しいこともあるので、協力学級での参加になることもあり、その場合参加の仕方や協力学級との担任や子ども間の連携の必要性を感じた。 ・ALTの先生方のお力が素晴らしい。様々な担当側の要望に応じていただき、たくさんの授業を次々とこなしていただいている、感謝でいっぱいです。 ・授業の反省点としては、楽しく活動が一番だが、ALTの発音をよく聴かせて発音させていきたいと思う。リピートする発音練習では良く聴いて、発音するリズムの速さやタイミングにもう一工夫したいと考えた。 ・今後の取り組みとして、マンネリ化しやすい題材を学年や個々の力に合わせてレベルアップできるように教材研究と改善をさせる姿勢が大切だと思う。
4	教諭 種市 美紀	亦楽小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・異学年交流の良さが生かされている授業だと感じました。異学年のため英語の能力にも差はありますが、英語の意味を子供たちに問いかけて全体で確認しながら進めることで、全員が理解して進めることができていると感じました。また、普段は学習に課題のある上学年の児童も、下学年に教えたり、譲ったりするなど普段見ることができない姿を英語の授業を通して見ることができました。普段消極的な児童も自信をもって発表するなど、英語の授業の楽しい雰囲気の中で子供たちの良さがたくさん出ており、一人一人にとって充実した時間になっていると感じました。 ・ALTの発音を聞かせるところは、聞く雰囲気を作って聞かせることで、子供たちが発音を意識して取り組んでいました。特にリズムに合わせてメニューを言う学習では、一人一人が意欲的に取り組んでいました。チャンツのような学習は、楽しんで覚えることができるのだと感じました。 ・子供たちが興味をもって取り組めるアクティビティだったため、全員が意欲的に活動をしていました。ソーシャルスキルに課題がある児童も、英語でのコミュニケーションの仕方について学ぶことで、日頃のコミュニケーションの場面でも生かされるのではないかと感じました。 ・「My dream lunch」の学習では、子供たちが楽しんで考えていると感じました。自分の考えたランチが、次の発表者の時に無くなってしまい悲しんでいる児童もいたため、学習したことを形として残しておくことが子供た

			ちの安心にもつながるのだと感じました。
5	教諭 樋浦 伸司	亦楽小学校	<p>特別支援学級（知的障害・情緒障害・下学年）における英語の授業というのは、英語のスキルの向上に通底しながら、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ソーシャルスキル 2 道徳 3 生徒指導（生活指導） の3点を強く感じた。 <p>① 常に英語の授業は「楽しい」雰囲気で行われており、陰湿な雰囲気や泣いている子がしようと英語の時間は「楽しい」雰囲気にならざるをえない。児童らがとても楽しみにしており、皆で一緒に楽しい授業がなされ、積み重ねている証左である。</p> <p>② 英語のよさは英語の時間には人柄が変わる（表出系）になることがあり、普段寡黙な子がフランクになり大げさなアクションや声で別人のようになっているのを毎回見ることがある。宮沢喜一元総理も英語で話す時は失言もするほどお人柄が変わるといふ。国語や算数の時間ではない魔法の時間である。</p> <p>③ 本時ではグループに5年生のリーダーのような子がいたが、多動で自制がきかない子が「見守られ」「こうしたら」とアドバイスされ、「ケンカではまあまあ」と諭されていた。先輩としての面目躍如である。</p> <p>本時の授業は特担が各児童の個性を熟知し、グループ編成や発問指名など綿密な計画が必要である。またその場での当意即妙なやりとりも必要で集団の知的レベルと興味関心が合わないところではあると感じる。</p> <p>支援学校の指導要領によれば「英語」は小学校3年生以上で1～3レベル（教科書等が読める一番上）3の児童であること、とある。特に①～③までを成果としながら指導に生かしていきたい。</p>
6	講師 山下 葉子	亦楽小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・長年の積み重ねもあり異学年での活動がスムーズに行われていた。上学年が下学年に発表しやすい雰囲気や声掛けをしていたり、下学年が上学年の言い方を聞いて真似して言う様子や「ぼく、わたしも言いたい」という意欲をもたせたりするような環境が授業者や子供によって作られていた。 ・英語以外の学習では、「いやだ」「めんどくさい」「やりたくない」と学習に対して消極的な発言や行動が多い子供も英Cの授業では、リーダー的存在となって友達に優しく声を掛けたり、小さな声でアドバイスしたりして生き生きと活動している様子が見られた。自分が前に出るのではなく、控えめにさりげなく、でもしっかりグループを引っ張っている存在感によって下学年が安心して活動に取り組んでいることにつながっていると感じた。 ・What～do you like? I like～.から want の言い方になったとき、混乱している子供もいた。I want～の言い方をもう少し練習して、自信をもって I

			<p>want が言えるようになってからお店屋さんに行く展開にしてもいいのかな、と思った。特に C チームの女子達。(手本になるような上学年の子供がいなかった)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ランチメニューをもらいにいくとき、グループ全員で行っていたので混雑しているように感じた。時間はかかるが、グループで1人ずつ(2人は座っている)もらいに行った方が、お店屋さん役の先生としっかりコミュニケーションをとることができて、I want~もしっかり言えたのではないかと思った。
7	教諭 中嶋 紀恵	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ T2が発音の仕方や日本語との違いを示す声掛けをしており良かった。 ○ ALT と対話をする場面で、学年や個人の実態に応じて問い掛けの内容を変えており良かった。 ○ 特別支援学級の英語の時間に、高学年の児童は別室で Writing に取り組む時間を設けることもあるということで、学年に応じた学習をさせていることが参考になった。 ○ 亦楽小学校と汐見小学校の授業展開がほとんど同じだった。ALT にとって取り組みやすいと思う。また、今後こういった題材を考えているか情報交換ができ良かった。
8	教諭 井上 和香	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・明るく楽しい雰囲気の中で、英語で話すことを楽しんでいる子どもたちの姿がたくさん見えた。 ・グリーティングタイムで、どの子も ALT と一方向のみではなく双方向の会話できていて素晴らしかった。「I'm O.」と答えて「Why?」と聞かれたときに、理由や自分の気持ちを表現できていた点に、日頃の英語活動の積み重ねの成果が出ていると感じた。セカンドクエスチョンも個々の学年や英語経験に応じたバリエーションのある質問で、英語に慣れ親しませるためにぜひ参考にしたい取り組みだと思った。 ・グループでランチメニューを決めるアクティビティでは、異学年のグループで相談したり英語の言い方を教え合ったりする場面が見られ、コミュニケーションが生まれていた。 ・ドリームランチを発表する際、全体での共有の仕方に工夫があるとなお効果的だと思った。例えばミニカードを活用してホワイトボードにそれぞれのランチを掲示しながら発表すると、聞いている方も飽きずに見比べて人気のメニューが分かるし、達成感が味わえて、振り返りにも活用できると思った。
9	教諭 吉田 裕子	七ヶ浜中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単な単語を使ってコミュニケーションがとれて、児童たちは楽しんで英語を学習していた。

			<ul style="list-style-type: none"> ・ALTと教員の役割ができており、テンポよく進めていた。 ・恥ずかしがらずに自分の意見を言える雰囲気はとても良かった。そして、答えた後にみんなで誉めることが自信になっている。 ・題材として取り上げたものが、児童の興味関心を引くことができ、身近なものだからこそ答えられるし考えやすいと感じた。 ・体を使いジェスチャーを交えて表現することは、中学生になってからでもできると良いと思った。
<p>【七ヶ浜町立亦楽小学校】 授業Ⅱ 2年2組 Nathaniel Hazel Stuart(T1) 小笠原 恵子 (T2)</p> <p>令和2年11月12日(木) 「すきかな? きらいかな?」</p>			
1	教諭 長澤亜紀子	松ヶ浜小学校	<p>○How are you?タイムでは、なぜそうなのか「Why?」と尋ねることで、さらにやりとりの質を高めることにつながっていて勉強になりました。</p> <p>○アクティビティの後の子どもたちの表情が本当に良かったなあと感じました。トレイにのった食べ物をもっている子どもたちが満足そうでやりきったという感じが伝わってきました。また、お店やさんをする子どもたちが安心して活動に取り組めるように、ペアを先生が決めていたことで、「What food do you like?」など自信をもって話していたように思います。</p> <p>○お店を準備している間の時間を使ってネイティブ先生がやりとりの練習していました。時間を有効に使っていて素晴らしいと感じました。</p> <p>○2年生の子どもたちが生き生きと楽しそうに英コミュの学習に取り組んでおり、多くのことを学ばせていただきました。ありがとうございました。</p>
2	教頭 高松 祐士	亦楽小学校	<p>子供達が楽しそうに activity に参加しており、発話量は十分だったと感じました。自分の思いを“I like ○○.”の形でしっかりと相手に伝えることができている、声量が少したりない(コロナ禍のせい?)かなとは感じたものの、どの子供も英語でコミュニケーションをしっかりとっていました。中学年、高学年と積み重ねていき慣れさせていくことで、英語を使ったコミュニケーション力を子供達に身につけさせ、財産になるようにしていく授業をこれからも実践してほしいとさらに強く感じました。</p> <p>話し合いでは、授業について学校の垣根を越えて話し合うことはとても良いことだと感じました。工夫している点や気づいたこと、困っていること、参考にしたいことなどを互いに表出し合い共有できたことで、それぞれの学校でのより良い授業づくりにつながるだろうことが予想されました。町教研の代わりといっても過言ではないような、貴重な研修の機会になったと思います。これからも同じスタイルで七ヶ浜町の子供達のために先生方が協働できればと感じています。先生方の財産になると思います。</p>
3	教諭 文屋 紀子	亦楽小学校	<p>○考えたこと <やりとりの量について></p>

			<p>A L Tの英語表現をよく聞き、英語を話せる子供が多かったと思う。しかし、アクティビティでは、コーナーによって発話量に差が出ていたので、コーナーの設定の仕方や周り方の指示を工夫するようになっていくと、やりとりが増えていくと考えた。</p> <p><低学年の英語コミュニケーションについて></p> <p>「この活動が楽しい!」という思いを大事にし、授業を考えることで、子供たちの活動が活発になると考えた。子供たちの英語コミュニケーションへの意欲を生かし、活動を組み立てていきたいと思う。</p> <p>○気付いたこと</p> <p>低学年の英語コミュニケーションでは、A L Tのネイティブの英語表現をよく聞かせ、子供たちがたくさん英語を話すように仕向けていくことが大切だと気付いた。</p> <p>コミュニケーションのよい例とそうでない例の提示について、とても有効だと思った。そうでない例を提示することで、よくありがちな悪いコミュニケーションに気を付けて、やりとりに向かうことができると感じた。「なぜよくないのか」「どこがよくないのか」を意識させられていたので、ぜひやってみたいと思った。</p>
4	教諭 本木真理子	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・「お店屋さんごっこ」という活動の場を設定することで、子どもたちが楽しく英語で交流することができていた。活動の目的が明確で、子どもたちが安心して取り組むことができていた。 ・身近な食べ物の日本語とは少し違う発音に子どもたちが気付き、一生懸命ALTの真似をしていた。 ・T1とT2のデモンストレーションが分かりやすかった。子どもたちがやりがちな「悪い例」を実際にやってみせることで、より活動が明瞭になった。 ・前半と後半を入れ替える際、前半の活動を振り返ったことがとても良かった。改めて本時の目標、よいコミュニケーションを意識させ、後半はよりいきいきと子どもたちが交流することができていた。 ・先生の願いがこもった、工夫が凝らされたすばらしい授業でした。手作りの食べ物カードやプレートを持った子どもたちの表情がとてもいきいきとしていました。 <p>各校の貴重な財産を、町の共有フォルダで共有していただければうれしいです。</p> <p>素晴らしい授業をありがとうございました。</p>
5	教諭 鈴木 麻耶	汐見小学校	<p>○ 18種類の食べ物をテンポよく練習し、2時間目で「what food do you like?」「I like ○○。」と、児童同士で交流している姿から、これまでの活動の積み重ねがしっかりあるのだなと感じました。</p> <p>○ 検討会で話題になった町内共有フォルダで、各校の実践したワークシー</p>

			トなどの資料を共有できたらとてもいいなと思いました。 コロナ禍のため、どのように児童同士のコミュニケーション活動を設定するのか、各校・各先生方が悩みながら指導計画をたてているのだなと思いました。
6	教諭 吉田辰之介	七ヶ浜中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・ほとんどの児童が意欲的に英語でコミュニケーションを取ろうとする姿が見られた。 ・お店屋さんとお客さんという設定があったことが、低学年の児童にとってより楽しいコミュニケーションのやりとりになっていた様に感じる。 ・授業者とALTの連携について、授業の中で役割分担がされているように感じた。お互いに生徒の状況を見ながら、メインで進めたり補助に回ったりということができていた。
<p>【七ヶ浜町立亦楽小学校】 授業Ⅲ 6年2組 Kevin Alexander Blake(T1) 当舎 聖美 (T2)</p> <p>令和2年11月12日(木) 「Let's think about our foods!」</p>			
1	校長 和田 祐子	松ヶ浜小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・双方向のコミュニケーションに活動意義が感じられ、子供たちの知的欲求が満たされる楽しい1時間でした。オリジナルカレーの具材を提案する側、提案を受けて選ぶ側、どちらも「やりたくなる」活動でした。そこに「インプットした英語表現への自信」が加わり、どの子もアウトプットを心から楽しんでいました。英語を使って自分の思いを伝える・相手の思いを受け取るという、まさに英語コミュニケーション科で目指している「学びの姿」でした。 ・授業の構成として、ねらいに迫るためのステップが明確でした。「この時間に何を学ばせたいか」を柱に、させたい activity に必要な practice が適切に設定されていました。単なる activity の羅列や、practice と activity の関連性が見えない授業にならないよう、このように1単位時間の流れをすっきりさせ、「なぜその活動か」を迷いなく説明できるような授業でありたいと改めて思いました。 ・ALTと担任の先生の「見せ方」が大変すばらしかったです。表現力豊かで、どこかコミカルな要素まで含んだデモンストレーションにより、「活動のやり方の理解」「基本表現の確認」「楽しさのアピール」のみならず、「コミュニケーションの奥深い魅力」まで伝えていました。実際に、お二人とも楽しんで授業しているように見えました。 ・今回、日程的に話し合いには参加できないので、授業だけ拝見するのは失礼かなと思って申し込まなかったのですが、前日に本校へいらした当舎先生からの宣伝を聞いて、どうしても行きたくなって参加しました。授業者の先生がそのくらいの信念をもって授業されているので、子供たちもこれだけ力が付いているのだと感じました。参観していても楽しく、大変良い刺

			<p>激を受けました。</p>
2	<p>教頭 新田 聡</p>	<p>松ヶ浜小学校</p>	<p>・ A L T と H R T の協働により作られた授業は、様々な要素が散りばめられていた。但しそれらは全て6年2組の児童の実態をもとに組み立てられたものであることを、事後の語る会で確信した。以下、語る会での気づきを記す。</p> <p>・ Kevin に七ヶ浜の英C、H R T から学ぶことについて質問してみた。彼の答えは「H R T と一緒に授業を作ることが楽しく、良いところだと思う。」だった。</p> <p>「実態をとらえている」H R T と、「native communicator」であるA L T の communication の中から次々に生まれるアイディアの量と質が、週2回行われる授業に直結しているからこそその言葉だと思う。</p> <p>・ H R T が今回の授業のアイディアを日常生活から見つけたと聞き、英Cの授業作りの最大の特長に気付かされた。それは「教科書ありきではない」「型にはまった共通のカリキュラムをもととしない」「担任の捉え、思い、考えをタイムリーに反映できる」という点である。</p> <p>授業を組み立てるための要素を担任の自己責任の下で求める originality と identity 重視の取組が、英Cの指導者が身に付けておきたい授業作りにおける柔軟性を身に付けているかどうかのバロメーターになると感じた。</p> <p>・ カレーの材料の産地を activity に取り入れることが、「食料自給率」「フェアトレード」など他教科と関連付けて学ぶ機会を作り出していることに気付くこと、職員室での natural communication が、今回の4授業共通の「食材」というテーマにつながっていることなど、英C授業の「精度を上げる」ための風土が亦楽小にはあるということを感じた。</p> <p>・ 視点を低学年のうちから与え、慣れさせることによって、やがてダイレクトに目標への自己評価ができるようになることが確認できた。子供同士の相互評価を一つの Communicate 場面として設定することにもチャレンジしたいと思った。目標とする communication を、相手の気持ちや考えにふれ、それに対して考えて返答する natural communication とし、英Cを低学年から行うメリットを生かした「精度を上げる」取組にしていきたい。</p> <p>・ 英C授業には、教員それぞれがもつ現在の Base がある（はずだ）。全国でも類を見ない七ヶ浜の英Cの根幹を理解し、その良さと自分自身の強みをしっかりと捉え、『学級経営、学級作りに英Cを生かす』という positive な視点を持ち、さらに「七ヶ浜の英語コミュニケーション」の価値を上げていければと思う。</p>
3	<p>教諭 齋藤 美穂</p>	<p>松ヶ浜小学校</p>	<p>どの学年でもネイティブな英語を聴かせることはとても大事なことではあるが、Words and sentences practice では、いかに楽しく、自然に聴かされるか難しさを感じていた。授業を参観させていただき、単純な practice だけど楽しい。単純な practice だけど複雑。テンポ・リズムに変化を持たせ</p>

			<p>楽しい practice になっていた。子供達も乗っていたし、HRT も 1 番乗っていて一緒に参加したくなる practice だった。</p> <p>6 年間ほとんど同じ指導計画の中で、どのように学年ごとに変化をもたせていくのかの難しさを感じていたが、食材を渡す児童は、提案をする。食材を集める側は、こだわりを持って集められるよう産地が書いてあり、子供の思考を広げ、知的好奇心を高めるアクティビティがとても良かった。</p> <p>さらに、二人のデモンストレーションは、「そのアクティビティをやってみよう」、「こんなこだわりのカレーにすればいいんだ」「こういうこだわりのカレーを作りたい」などの見通しや意欲につながっていた。</p> <p>1 つの食材をもらうまで、複数のセンテンスを言ったり聞いたりする内容だったが、ケビン先生のもっていきかたで、とまどうことなく会話できていた。また、子供達のやりとりの中でも、言い方をフォローしている場面があり、授業の中での、子供たち通しの関係性の良さを感じた。</p> <p>HRT が授業を楽しみ、それが、子供達にも伝わり、ALT・HRT・子供たち、教室全体が、学習を楽しみ、会話を楽しみ、友達の考えに感心し、共感し合う姿がとても素敵でした。</p> <p>大変勉強になりました。ありがとうございました。</p>
4	教諭 板橋 瑞枝	松ヶ浜小学校	<p>授業から</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Words and sentences practice では、ケビン先生の発音に変化に富んだリズムとスピードで躍動感を生み出し、児童の意欲をぐんぐんと引き上げていました。6 年生の教室にあれだけ大きな声が響くとは思いませんでした。一人一人が気分を高揚させながら、よりはっきりと発音しようとする姿に圧倒されました。 ・ アクティビティの前に会話のやり取りの仕方を繰り返し実演して見せることで、児童に自分も「話してみたい」「やってみよう」という期待感を持たせていました。また、ケビン先生とのやり取りを通して、相手の思いを受け取って話すことの大切さにも気付かせていました。 ・ 出来上がったオリジナルカレーがどんなカレーか、英語で考え英語で思いを表出しようとする児童の姿が素晴らしかったです。また、それを聞いて他の児童がすかさずレスポンスして盛り上がるなど学級の雰囲気が実に良かったです。 <p>語る会から</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 當舎先生が学級の実態から双方向のコミュニケーションの楽しさを味わわせるために、授業作りにあたって様々な工夫を考え試行錯誤しながら準備されてきたことを知り、大変勉強になりました。また、英語での自然なコミュニケーションをねらって型にはめこまない言い方にすることは、今後の授業作りで実践していきたいと思いました。

			<p>・振り返りについて情報交換を行うことができ、大いに参考になりました。いろいろなやり方を見習う児童の実態や発達段階に合わせて取り入れていきたいと思えます。</p>
5	<p>教諭 大友 邦彦</p>	<p>亦楽小学校</p>	<p>「オリジナルカレーを作ろう」というテーマの設定により, "I like ○○." "it's from ○○." というセンテンスに自分の意図や思いを付け加えて話すことになり, 聞く方も, 相手はどのような意図をもって話をしているのかということに気を付けて聞いていた。教師が特別に指示をしたのではなく自然と互いに意図を伝える・くみ取るというコミュニケーションが取れているところに授業者のねらいを感じることができた。生活の中であり得る場面・状況をテーマに設定することで, コミュニケーションをとる必然性が生まれ, 子供たち一人一人が思考しながら英語でやり取りする活動が生まれるのだということを知ることができた。</p> <p>授業後の話し合いでは, 40分の授業・活動の中で振り返りをどのようにしたらよいか, 授業の質を上げる, 精度を高めるとはどのようなことなのかということが話題となり話し合いが行われた。「アクティビティができて楽しい」というところから, 体験できたこと, 学んだこと, 友達と関わったこと等から得られる楽しさに気付かせていきたいと感じた。そのためにも授業者がその活動で何を学ばせるのか, 何のために活動を行うのかということを知りたかった授業をつくり, 授業のめあてに沿った振り返りをしていくことが授業の質を向上させることにつながると改めて感じた。</p>
6	<p>教諭 清野 弘平</p>	<p>亦楽小学校</p>	<p>・6年2組の英語コミュニケーションの授業から「自然なコミュニケーション」をしていると感じた。定型的な英語の会話ではなく, 自然と心から出る言葉(英語)だと感じた。そういったコミュニケーションを可能にしているのは, これまで, ネイティブな英語を浴び続けた積み重ねであると感じた。しかし, 積み重ねた活動はマンネリ化するというつらさもあると話題になった。例えば, 6年生では「カレー」を題材にしたが, その題材はこれまで何度も行っている。そうすると子供たちは飽きてくる。そのため, 本時では, カレーの具材を集めると同時に, 産地について考えさせていた。このように, 活動に一工夫を入れる。その一工夫に子供の実態から見た教師のこだわりが見えてくる。つまり, 同じ題材の中にも教師のこだわりがあれば, 同じアクティビティであっても子供が前のめりになる授業が可能であると感じる。</p> <p>・英語コミュニケーションはアクティビティが多く, 時間があっという間に過ぎてしまうということが多々ある。そうすると, 振り返りの時間が短くなり, できなかったという時も間々ある。先生方との話し合いの中で, 振り返ることで学びを積み重ねるといった点など, 振り返りの重要性を再認識した。「楽しかった?」という振り返りではなく, 「なぜ?」と問い返したり, 本時</p>

			<p>のねらいに立ち返ったりするなどの工夫が必要であると感じた。</p> <p>・「授業の質の向上」「授業の精度を上げる」について話題になった。教員については、本校では、ALT を話し合いながら、職員室で話し合いながら、子供の実態に応じた教材やアクティビティの選定を行っている。そういった授業作りは、自身の資質・能力の向上につながると感じた。</p>
7	<p>教諭 外山 友</p>	<p>亦楽小学校</p>	<p>【子供の学びの様子から自分自身が学んだこと】</p> <p>・「学力が低い子供が、英語コミュニケーションの中で、友達とどのように関わっていくのか」という点を見ることができた。S君は、「Where」と「What」の区別がついておらず、音のみで覚えており、グループコミュニケーションの中で間違えてばかりだった。しかし、周りの子供たちが、明るく「ここは、What って言うんだよ」と教えたり、一緒に小声で発音したりしていた。支えられているという温かい雰囲気はもちろん、英語をしっかりと話そうとすることを意識して恐縮してしまうのではなく、まずは発話してみて、周りとのコミュニケーションで正しいものに気付いていく、という流れがS君にとってはとてもよかったのだなと思った。「英語は難しいから分からない」と考えている子供も、周囲とのコミュニケーションによって気持ちが引き上げられ、その中で間違えながらも何度もトライして身に付けていくという子供の学ぶ過程を、私自身学ぶことができた。</p> <p>【英語コミュニケーションの授業づくりとして学んだこと】</p> <p>・子供たちの課題であった「単発のコミュニケーション」や「軽いノリの浅はかなコミュニケーション」という課題から、「双方向のコミュニケーションを目指すこと」「相手の思いを受け止め、その思いに応じた答え方や提案を英語で考え、英語で伝え合うようにする」という「授業の質を上げるポイント」につなげているところに納得した。授業づくりの流れとして、子供の実態から考え、子供の課題を基に、授業の質を上げるポイントを設定し、そのポイントからアクティビティや対話の内容を決めていた。授業者の意図がよく見え。「What do you want to eat?⇒I want to eat ~.」「How about ~? ⇒Yes,please./No,Thank you.」「Where is it from? ⇒It's from~.」のように、3往復以上のやり取りが生まれるように仕組まれていた。このような授業づくりの思考が、授業に一本筋を通すのだなと感じた。楽しさばかりだけのアクティビティが並び、子供たちが楽しいか楽しくないかだけで授業に向かっている姿を見受けるときがあるが(自分自身も陥ってしまうときがある)、このようにしっかりと目的の下に授業が構成されていると、子供たちは荒れず、落ち着いて学ぶことができるのだと実感した。</p> <p>【語る会で話題になったことについて、自分自身が考えたこと】</p>

			<p>・振り返りについて</p> <p>⇒その1時間で何に重きを置くかにもよるが、もし、ねらいと振り返りに重点を置く1時間にするのであれば、しっかりと振り返りを書かせて交流させる必要性を感じた。子供たちに、ただの「楽しさ」だけを残すのではなく、「何が楽しかったのか」をフィードバックさせる必要がある。その「何が」という観点も、本時のねらいにあるので、振り返りをさせる前に、「今日めあては～だったけれど、どうだった？」と授業（コミュニケーション）の目的に戻すことが大切だと考えた。</p> <p>・テンポの良さについて</p> <p>⇒テンポの良さは、子供たちに勢いをつけ、授業の流れを良くするが、「速いテンポが良い」と一概には言えない。基本的にはスピードがあり、大事なところはゆっくりと確認し、さらにまたスピードが上がる、といったテンポの変化も大切だ。同じテンポでは単調になってしまうので、緩急をつけることの大切さに改めて気付くことができた。</p> <p>・単元構成について</p> <p>⇒「食品ロス」「フェアトレード」「食料自給率」について考えるきっかけとしても取り扱っているという聖美先生の言葉に、授業者としての視野の広さを感じた。英語コミュニケーションは、世界を話題にできることも強みだ。学習を通して、世界的な課題を扱ったり、多様な文化に触れたりする機会を設定することの大切さを学んだ。</p> <p>【授業の見方や語る会について】</p> <p>・司会の清野先生もおっしゃっていたが、「語る会」や「事後検討会」は、授業がどうだったかというものを検討する会ではなく、参観者が授業者からいかに学ぶか、学んだことから何を考えることができたか、だと思ふ。「重箱の隅をつつく」「ただ褒めまくる」「発言もなくメモも取らない」といった表相的なものであれば、ただの「授業発表会」になり、次の自分たちの授業につながっていかないだろう。町内で授業を見合ったことで、授業者だけが学ぶのではなく、参観者こそが必死になって学ぶ必要があると考える。授業者も参観者も今後につながるような授業や語る会にしていきたいと思ふ。</p>
8	教諭 熊谷 宏規	汐見小学校	<p>①担任や ALT が楽しんで授業を行っているのが、授業を行うクラスのととても良い雰囲気につながっている。また、当舎先生がおっしゃっていた、一方的なコミュニケーションではなく、双方のコミュニケーションがとれるような授業の構成になっていた。</p> <p>②ALT の先生にリズム感があり、子どもたちは楽しみながら英語を練習でき</p>

			<p>ていた。答える時も単語だけではなく、文として話そうとする姿勢にこれまでの積み上げを感じることができた。</p> <p>③担任と ALT の役割分担がとても良く、事前にしっかり打合せをしているのがよく伝わってきた。改めて、事前の準備の大切さを感じることができた。</p> <p>④振り返りの際は、今日の授業のめあてに必ず立ち返らせてから振り返りさせることが大事だと感じた。</p> <p>大変勉強になりました。ありがとうございました。</p>
9	教諭 山口 良之	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・一方的に伝えるのではなく、「相手の思いを受け取る」活動を設定したいという授業者の意図が、伝わる授業の構成になっていた。自分好みのカレーを作るというシンプルな活動の中に、「こだわりたい」「伝えたい」「聞いてみたい」と児童が思える仕掛けやALTとのやり取りが仕掛けられていて、大変に刺激的な授業だった。 ・ALTと授業を作り上げることが、ALT自身の自信ややる気、モチベーションにもなっているのだと言うことを、本人の口から聞いたのも良かった。 ・「質の高いコミュニケーション」とは・・・の話し合いが、興味深く感じた。参加者の先生方それぞれに解釈やこだわり・思いがあり、自分自身の考えを深めるよい機会となった。「双方向のコミュニケーション」「ナチュラルなコミュニケーション」「必要感を感じさせる授業」等、表現やアプローチの違いはあったが、どれも納得できる話しに思えた。
10	教頭 酒井 智紀	七ヶ浜中学校	<p>とてもテンポが良く、心地よいリズムが最後まで続いた授業という印象を持った授業でした。そして、何より kevin 先生の授業スキルの高さに驚きました。また、當舎先生も kevin 先生のテンポに合わせてながら、児童一人一人にしっかりと目を配り、個別の対応をしつつ全体の雰囲気づくりも担うなど、お2人の連携の練度も非常に高いと感じました。</p> <p>質を上げるポイントとして掲げられている部分では、双方向でコミュニケーションを深められるよう教具や話し方の手順が考えられており、児童が授業の到達点をイメージしながら活動することができていると感じ巻いた。これまでの英語コミュニケーション活動の積み重ねにより、生徒も先生方も質の高い授業が展開されており、たいへん参考となりました。ありがとうございます。</p>
11	教諭 半澤 律子	向洋中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の「話したい」「伝えたい」という気持ちが終始あふれ出る授業であった。ALTのテンポのよいリズムカルな英語と、一体化して授業を行っている児童達の姿がとても印象的だった。 ・今回6年生では、「オリジナルカレーを作り」を題材に、4年生の授業では「カレー作り」を題材としていることから、内容をスパイラルに指導していくことで、既習内容を使いながら、新しい表現を取り入れていく機会

			<p>となっていると感じた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の思いを伝える活動として後半, I want to eat my original curry. や I want potatoes …… があり, どの児童も自信をもって, それぞれの思いを伝える姿が印象的だった。活動時間が各2分と全体の流れから考えると, 自己表現の時間が短いと感じた。もう少し自己表現の活動時間を確保してもよいのではなかだろうか。(5~10分) 児童の様子から考えると, 児童の知的欲求は教師側の想像以上に高く, 語彙力もかなり高まってきていると感じる。つまり, 今回の授業で後半の会話活動に入るまで, ALT や JET と児童との, 工夫を凝らしたリズムカルなパターンプラクティスが続いたのだが, おそらく児童はより短くても, 自分の思いを伝えるたり, 受け取ったりすることができると感じた。また, メニューをオリジナルカレーに限定するのではなく, メニューや材料を自由に考えさせることで, 「自分の思い」にもっと近づくことが出来るのではないかと感じた。 ・「小学校」「中学校」における「外国語科」の目標は4技能5領域共につながっていることは当然であるが, 中学校においては「まとまりのある内容」(短文や一文というような文章ではなく, 話題に一貫性のある, まとまりのある文章のこと) という点が大切になってくる。七ヶ浜町では小学1年生から英語コミュニケーション科として英語に慣れ親しんできていることや, 今回の授業での6年生の様子, そして小中接続という点からも, まとまりのある英文(会話文)に触れていくことができるくらいにまで, 子供たちが成長してきているように感じた。
12	青木 徹	七ヶ浜国際村	<p>授業の始まりからとてもリズムカルで, 子どもたちも先生方も楽しそうな雰囲気が伝わってきました。T1, T2 の連携も取れており, 二人の盛り上げ方(掛け合い?)も上手なので, 見ているこちらもどんな授業が始まるのかなあ?とワクワクさせられました。</p> <p>過去に何度か公開授業を拝見させていただいておりますが, フラッシュカードを見せて発話させるテンポが, 以前に比べるととても速く, 緩急もつけられていましたが, 子どもたちがその速さについて行っていること, また, 先生と子どもたち数人がカードの食べ物を同時に発話する場面では, 誰が何を言ったのかを聞き分けることができていること等, 英語コミュニケーション授業を積み重ねたことで, 子どもたちの理解度も授業の内容も着実にレベルアップしている事を感じました。</p> <p>そして何より子どもたちが楽しそうに授業を受けている姿や, 自信をもって積極的に手をあげて発言している姿がとても印象的でした。</p> <p>まさに“とんとん Good job!!”ですね。</p>

13	丸田 有記	七ヶ浜国際村	<p>6年2組のケビン先生と當舎先生の授業を拝見しました。</p> <p>とてもテンポが良く、スピードもあるのに、児童の皆さんがそれについていっていることに驚きました。</p> <p>さらに、ほとんどの子が積極的に挙手をして発言していたことにも驚きました。英語を話すことや間違ってしまうことを恥ずかしがる年齢かな？と思っていたのですが、そのような様子が無かったのは、當舎先生の声掛けやフォローによって児童同士の信頼関係が築けていること、ケビン先生が英語コミュニケーションの授業を受ける児童に対して、意欲が高まるような進め方をされているからではないかと感じました。</p> <p>とても活気のある、わくわくするように授業を見させていただきました。</p>
14	国際交流員 ティファニー スノン	七ヶ浜国際村	<p>Kevin 先生はとても面白かったです。授業に行って、とても楽しく過ごしました。</p> <p>6年生もびっくりするほど上手でした。それは先生たちの影響だろう。</p> <p>リズムを使って単語を教えるのもいいアイデアだと思って、子どもたちも好きそうでした。内容もちゃんと分かって、元気で答えを出すのもすばらしかったです。</p> <p>一つだけ考えた点は発音でした。もちろん単語が分かると言えるのは一番大切だと思いますが、子どもたちが「英語」でしゃべるより「カタカナ」でしゃべっている気がすると思いました。英語っぽい発音も少しやるといい影響があるでしょう。</p>
15	国際交流員 サンティアゴ ゴラベロ	七ヶ浜国際村	<p>I thought Kevin-sensei did a great job keeping his class engaged and was impressed by his rhythmic teaching methods. I also thought it was good there were so many kids who volunteered to speak when Kevin asked.</p>
<p>【七ヶ浜町立亦楽小学校】 授業Ⅳ 4年2組 Lin Rebecca Yang Xi(T1) 工藤 理恵子 (T2)</p> <p>令和2年11月12日(木) 「What do you want?」</p>			
1	教諭 松川 昂	松ヶ浜小学校	<p>『マイカレー』を作って発表する」という Today's target を設定したことで、子どもたちは積極的に英語を活用し、コミュニケーションを図ろうとする姿が見られました。「カレー」にしたことで子どもたちの食材選びの幅がそれぞれの思いやテーマにそって、大きく広がっていったと思います。実際にシーフードやベジタブルカレーなどマイカレーへの思いを発表していました。また、「マイカレー」にすることで、子どもたち自身の作りたいカレーを作ることができ、I want (食材) を積極的に使いたくなるような工夫であったと思いました。同時に同じ食材を何度も選ぶことも可能であり、必ずしも難しい単語を用いる必要がないため、子どもが自信をもって取り組むことができるようになっていた点もとても良かったと思います。</p> <p>また、お店役にもお道具箱で食材カードを隠すという工夫がされており、</p>

			<p>英語を用いて何がほしいのか伝えなくてはいけない、という状況を作り出していました。</p> <p>レスポンスを重視し、Nice Amazingなどを子どもたちに教え、かつ、カードとして黒板に示していた点もとても良かったと感じました。友達の発表に対してそのようなレスポンスができるということは、まさしくコミュニケーションの姿であると思います。子どもがレスポンスをできるようにするためには、子どもがそのときに言いたくなる気持ちや言葉を予想し、あらかじめ指導しておく必要があると思います。そのような語句を徐々に増やしていくことで、アクティビティ中の何気ない会話でも英語を用いてレスポンスをすることができるようになるのだと授業を参観して感じました。</p> <p>最後に、多くの子どもたちが英語を用いて楽しそうにコミュニケーションをしている姿がとても印象的でした。これは何度もI wantを繰り返して学習した上で、自分の思いを十分に表現できるように単語が充実しており、個性を生かすことのできる幅広いゲーム性があることで実現できたように思います。</p> <p>これからの授業で今回の参観で学んだことを積極的に取り入れていきたいと思っています。</p>
2	教諭 齋藤加奈子	亦楽小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・発音が良い子供が多いのは、ALTの英語をよく聞いている子供が多いからだということだった。よく聞いて、真似して言うみて、自信になる。やはり聞くことからコミュニケーションはスタートすると思った。 ・子供に英語で聞く必要感をもたせる場面設定を行うことで、自然とコミュニケーションが生まれていた。 ・子供たちの思いを表現できるようにするのが、コミュニケーションのゴールだと思った。工藤先生の授業では、カレーに自分の好きな具材を入れる、という表し方だった。子供たちの個性が表れたとても面白いカレーが出来ており、発表されるのがとても楽しみな展開だった。自分が表現したことを聞いて、反応をもらえたら、話してよかった、話すことは楽しい、英語は楽しい、とつながっていくのだと思う。また、英語だけに限らず、どの教科でも教科ごとの表現方法を使って、自分の考えを友達と共有することの楽しさ、深まりの実感をもてるようにすることと同じだと思った。
3	教諭 加藤 滋	亦楽小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・「カレー」という題材が子どもたちの発想を引き出していた。 ・場の設定がよかった。何を売っているか、売り切れていないか、聞いてみるまで分からないからコミュニケーションするほかない状況を作り出していた。
4	講師 今野 守	亦楽小学校	<p>工藤先生の授業を通して、まずT2の役割の難しさを感じた。このことは話し合いでも話題に上がった。日頃から難しいと感じていたが、周りの先生方も同じことを感じていらっしまった。どこまで入っていいのかわからなかった</p>

			<p>が、特に基準はあるわけでもないということ学んだ。そのため、自分自身が入っているタイミングを見計らい、普段の児童の実態に即して T1 を補助したり英語を日本語で児童に伝えるという役割をこなしたりしていく必要性を感じた。また、先生方から T2 の役割は ALT と子どもをつなぐこと、子どもと子どもをつなぐということをしき、その役割をこれから理解して実践していくことで児童の学びを深めていくことができるのではないかと考えた。</p> <p>また、教科書にとらわれなくて授業を行っていくことが大切になると感じた。教科書ではピザを取り上げていたが、工藤先生は児童の実態に即してカレーを教材で取り上げていらした。そのため、児童の学習意欲の向上につながっていたと考えた。学校の給食でも出ているため非常に身近である。日頃の授業から教科書をベースに考えていることが多いため、児童の実態に即して教材を考えていきたい。</p> <p>レベッカ先生の姿からフラッシュカードの単語を発音させる際に児童を飽きさせないような工夫と単語を定着させるための工夫を学んだ。特に単語にならずにテンポを変化させることが非常に有効であると思った。英語だけでなくもいかせるものであるので実践していきたい。</p> <p>また、工藤先生の T2 の姿から、児童の言葉を否定せずに受け入れ児童に寄り添う姿を私は目指したいと考えた。工藤先生は学級を歩きながら児童の発音や活動を見て素早く児童とそばにいる姿があった。そのため子どもたちも安心して学習に取り組んでいたと考える。目の届きにくい児童、各教科で支援が必要な児童のそばにすぐに寄り添っていけるように意識していきたい。</p>
5	講師 水野 充	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・参観・話し合いから考えたこと <p>レスポンスがとても良かった。またお店屋さんごっこやカレーといった親しみやすい題材によって、児童の英語に対する反応は、非常に良かった。そしてケビン先生同様レベッカ先生のテンポの良い授業によって、児童も楽しそうに活動していた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今回学ぶことができたことは、T2 のポジションについてである。 <p>検討会のときに議題に挙げてもらい非常に感謝している。自分自身あまり担任は前には出てはいけなかった。という縛りに縛られていて、ALT の先生の言葉を聞くだけ、児童の姿勢を注意する程度であった。しかし今回の大内先生の「担任は、生徒と生徒をつなぐ、生徒と ALT をつなぐ者」という言葉で、もっと児童とも関わりを持ち、英語の授業に参加するべきである。と気づくことができた。面白い授業をする先生は、子どもと共に楽しみそして学ぶのだと言うことを今回の英語を通して改めて実感することができた。</p>
6	講師 高橋 駿成	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・実生活に結びつけやすいテーマである「カレーの具材選び」だったのでゴールが分かりやすく、子供たちもイメージしやすい内容だったと感じました。

			<ul style="list-style-type: none"> ・子供たちは、難しさが無く英語を発語していた。普段の英語コミュニケーションの学習を通して英語に慣れ親しんでいる様子が伝わってきました。 ・取り上げた食材が豊富で楽しく学習できていました。表現の自由性があり、子供のイメージも膨らみ、「ベジタブル」「シーフード」などの単語が記されていました。 ・発表の際には、友達の良さを認める雰囲気があり、発表内容を聞いて面白い点に気付いたり、盛り上げたりする姿に英語コミュニケーションの「明るく楽しく元気よく」を見つけることができました。
7	教諭 加藤 知美	七ヶ浜中学校	<p>リズムカルに単語反復練習をしていた。テンポが徐々に速くなることで児童がどんどん適応していく姿が見られた。</p> <p>感情表現をジェスチャーで示すことで英語に対する関心を高めていた。褒めることで、コミュニケーションへの意欲を高めると同時に英語のスキルが身についていく様子が見られた。</p> <p>カレーライスの具材を買ったり、売ったりするお店でのやり取りを遊び心を入れながら楽しく学習したので、児童の満足度が高かったようです。それぞれのカレーライスが個性的であったので、自己表現の場にもなったし、他者を認める場にもなった。互いを認め合うことでさらにコミュニケーションがしやすくなったと感じた。</p>
8	国際交流員 ティファニー スン	七ヶ浜国際村	<p>Rebecca 先生は元気で lesson をしました。残念ながら子どもたちがそんなに元気じゃなさそうでした。しかし、参加した子は質問をちゃんと答えて、レッスンがよく分かった気がありました。元気じゃなくても皆さんは必要な時にちゃんと答えを出して、英語能力をよく見せることは素晴らしいと思いました。</p> <p>Rebecca 先生も大変がんばりました。お疲れ様でした。</p>
9	国際交流員 サンティアゴ ラベロ	七ヶ浜国際村	<p>Rebecca-sensei's class also went well I felt. I was able to notice how she made the content easier for the 4th years than the 6th years Kevin had. I think the size of the class way have made it difficult to keep everyone engaged. There were also a couple students talking through the lesson which I thought was distracting.</p> <p>I thought both teachers could have focused a little more on pronunciation.</p>
【七ヶ浜町立松ヶ浜小学校】 授業 I 2年2組 Kevin Alexander Blake (T1) 長澤 亜紀子 (T2)			
令和2年11月11日(水) 「好きなくだもの」			
1	教頭 新田 聡	松ヶ浜小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・HRTの授業は、英Cに限らず普段から子供が自然にやりとりできるような関係性ができている。これがベースとなっている今日の授業も、ALTとの見事な communication の連続だった。 ・この授業では、途中の変化も含めたテンポ良く input と output を繰り返す

			<p>時間をたっぷりとしたことと、実態にマッチした activity を行ったことで、ALTからはもちろん、子供達同士でも互いに「シャワーのように」英語を浴びせ合い、教室がグループ感のある communication で満たされていた。</p> <p>・また、ALTとHRTのその場での判断で追加の activity を行ったところは、このコンビの真骨頂だった。</p>
2	主幹教諭 折居 晃弘	松ヶ浜小学校	<p>全体から個人へと段階的に進めることで、児童は自信をもってアウトプットできていたように思う。今回の授業の中でも変容が見られ、声の大きさが前半と後半では、明らかに後半の方が大きかった。また、アウトプット量を増やすためにも、カードを配るときにも黙って配るのではなく「Here you are」「Thank you」という会話も、何気ないけど効果的だと感じた。</p> <p>授業を作り上げていく上で、ALT と担任との「アイコンタクト」「阿吽の呼吸」というのも大事だと感じた。授業前の打合せで意思疎通を図ることはもちろん、授業の内容以外での普段の何気ない会話も授業づくりには役立っている。</p>
3	教諭 小林枝里香	松ヶ浜小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・はじめの挨拶の場面では、様々な問いかけをテンポ良く進めていた。リズムにのって、How are you?の質問に答えることで、楽しく答えることができていた。 ・本時のコミュニケーションUPのポイントを確認することで、児童のコミュニケーションへの意識が高まった。 ・「Review」では、テンポ良く言葉の確認ができ、次のアクティビティにつながる練習がよくできていた。 ・Activity 1～3を通して、集中して見たり聞いたりしていないとできないという活動が、児童の知的好奇心が深まり、緊張感をもって活動できていた。リズムを使って発話させることで、発話量が多く、たくさんアウトプットできていた。 1→3にいくにつれ、全体から個人への活動となり、自信をもって楽しく活動できていた。 ・振り返りの時間では、振り返りの観点を与え、それぞれが今日の活動についてしっかり振り返ることができていた。
4	教諭 加藤 滋	亦楽小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが積極的に聞き取ろうとしていた。 ・複数の英語の発話を聞き分けるという難しい課題をむしろ楽しんで授業に参加していた。
5	教諭 高橋奈保子	汐見小学校	<p>○1 時間子どもたちを飽きさせずに、いろいろなパターンのアクティビティが用意されていて、とても充実した活動になっていたと思います。</p> <p>○ケビン先生の、テンポよいチャンツで、どんどん発声したくなる楽しい時間でした。一つのリズムがなじんだところで、他のリズムにうつるときには、ちょっと慣れるまで難しいかなと思うところもありました。</p>

			<p>○シャッフルクイズは、ちょっと難しく、当てたい気持ちをくすぐる活動で、子どもたちの言いたい気持ちが高まっていくのが感じられました。児童の実態に合った活動だったからだと思います。簡単すぎず、難しすぎず、子どもたちの話したい意欲を高めるようなそんなアクティビティを、私も考えていきたいと思いました。</p> <p>○たくさん話すこと、たくさん聞くことが盛り込まれていて、この授業のねらいが達成できていたと思います。ありがとうございました。</p>
6	教諭 津田 拓真	七ヶ浜中学校	<p>今日の授業の流れが予め板書で示されており、児童も流れに沿ってスムーズに授業に参加できていました。</p> <p>「好きなくだもの」という単元で、単に果物の単語を言うのではなく、リズムに乗りながら、「What fruit do you like?」という疑問文や「I like～」といった肯定文が繰り返し言葉で発し続けるのが面白いと感じました。英語を言葉で発する際に、どうしても頭の中で日本語を英語に直すという思考をしまいがちですが、低学年の段階から反射的にイラストや質問に対して英語で答える練習をしておくことで、今後スムーズに英語で会話を成立させることができるように感じました。</p> <p>何より、授業のテンポが良く、Kevin先生と長澤先生の連携がすばらしかったです。安心して多くの児童が積極的に挙手しており、自信をもってコミュニケーションをできるようにするというアクティビティとしての活動が十分に達成されていた授業でした。拝見させていただき、とても勉強になりました。</p>
7	教諭 山村 弘行	七ヶ浜中学校	<p>授業を参観させていただきありがとうございました。</p> <p>中学校の国語を担当しており、子供たちへの働きかけや支援の仕方等について参考となる点が多くあり、今後の授業に向けた取り組みに活かしていこうと思います。</p> <p>英語のコミュニケーション活動の授業という視点で、気づいたこと等を書かせていただきます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ALT中心の授業で、活発に英語が飛び交っておりとても良い授業だと思いました。 ・英語を浴びせるかのごとく、授業が進んでいると感じました。 ・頭の中で日本語を英語に変換して発言するのではなく、見たままで発言しているのは、コミュニケーション活動の基本であり、反射的に英語を発音している、反射的になるように仕掛けている点が、良かったと思います。 ・T2である先生は、個への支援だけで十分なような気がします。ALTの説明を補足する必要はないように感じます。子供たちは一生懸命にALTの説明を聞き、内容を理解しようとしていたので、そのまま活動が

			スムーズにできなくても、補足しないで進めていくのもいいように感じました。補足があるとわかると、ALTの説明ではなく、T2の補足を聞くようになると思います。また、T2の一緒の活動もなくてもよいように思います。子供たちの発音や発言だけで十分でした。
8	係長 稲妻 和久	町教育委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・よく手が上がる。 ・発信が多い。全員の声が聞こえる。 ・子どもの表情が良い。 ・先生も楽しんでいる様子が子どもたちに伝わっているように感じた。 ・Kevin:カード、テンポ音、黒板へのカード添付、カード配付など、あきさせない工夫があった。児童とのカードの受け渡しでも発語があり良いと感じた。 ・先生はよく児童の声に耳を傾けているところが良いと感じた。 ・英語を通して自分の頭で考え、自分の言葉で意見や考えを伝え合える力を身に付けさせるためにいろいろなアプローチと工夫が必要になってくると思います。よろしくお願いします。
<p>【七ヶ浜町立松ヶ浜小学校】 授業Ⅱ 3年1組 Nathaniel Hazel Stuart (T1) 齋藤 美穂 (T2)</p> <p>令和2年11月11日(水) 「好きな動物やペットをおしえよう」</p>			
1	教頭 新田 聡	松ヶ浜小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・このクラスの最大の特長は、「聴く」構えが身に付いているということと捉えている。例え発言者のボリュームが十分ではなくても、「聴く」先の「活動」への意欲の表れであろうか、自然に教室がそういう空気になるのである。 ・今日の授業では、はじめの greeting time を一人一人丁寧に行った。この時間がクラス全員の共有の時間にならなかったことも含めて、「前半に時間が掛かってしまった」とHRTが振り返った通りだと感じた。 ・全員が「聴く」良さは絵本の読み聞かせ場面のやり取りでも表れていたし、相手を替えながら一人一人が確実に communicate する場や動きの仕組もよく考えられたものだった。よく「聴く」ことで2往復、3往復の communication が成り立つ体験をこの時期にさせることの大切さを実感させられた授業だった。
2	主幹教諭 折居 晃弘	松ヶ浜小学校	<p>Greeting の時から、インプット・アウトプットを意識した授業だと感じた。授業最初の呼びかけを、全体だけでなく一人一人に担任とALTが手分けして聞いていく方法は、なるほどなあと思った。また、英語にはない「もういいかい。まあだだよ」のリズムを、あえて英語に当てはめてALTが発音していたのも、リズム感があってよかった。独特のリズムを聞いただけで、児童は、かくれんぼだと理解し、英語での言い方に慣れ親しんでいたように感じた。</p>

3	教諭 松川 昂	松ヶ浜小学校	<p>アウトプットをするために、確実なインプットとアウトプットをすることへの抵抗をなくす、といったことが大切であると、参観した授業や英語コミュニケーションを語る会を通して感じました。アウトプットをすることへの抵抗をなくす、では「自信をつけさせる」「アウトプットする場を整える」「アクティビティの難易度やルール」などをはじめとする多くのアウトプットをする抵抗を減らす視点がありました。特に「アクティビティの難易度やルール」ではコミュニケーションをしなければいけない場があり、競争要素のないルール行うことで、コミュニケーションが担保されると思います。一方、難易度が易しすぎず、少し頑張ればクリアできるようにすることでアクティビティの意欲も高まっていくと思います。この3要素が整うことではじめてインプットとアウトプットが高い質で行えると感じました。</p> <p>そのような質の高いものを行っていたと感じたのは、振り返りの際にとある児童が友達のヒントがわかりやすかったと述べていたときでした。ヒントをする、ということは友達が動物に関するヒントの語句をインプットして、それをアウトプットしたものであると思います。そしてそのヒントを評価するということは、英語で出されたヒントをインプットした上で善し悪しを判断する、という非常に高度なことであったと思います。友達にヒントを出したくなる、友達の問題を解きたくなる、というゲーム性、場作りがあったからこそのものであったと思います。</p> <p>また、英語を用いてコミュニケーションをしたいと意欲を高めるためにレスポンスやリアクションを指導することも大切であると感じました。すぐに表現したい気持ちや言葉が英語で話すことができればより英語のコミュニケーションが楽しいものになっていくと思います。</p> <p>今回の参観授業で学んだことや取り入れてみたいことが数多くありました。次の授業から早速取り入れていきたいと思います。</p>
4	教諭 河原田千春	松ヶ浜小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・ Greeting で、T1,T2 が一人一人時間をかけて挨拶をしていくことで、全員がTとコミュニケーションをとれていると感じるのだと思いました。この積み重ねが大切だと改めて思いました。 ・ 絵本の読み聞かせをすることで、子ども達はその世界に入り込んで、集中して活動していました。ネイト先生の話の聞かないと、動物を探すことができないので、ネイト先生が話すときは聞く、考えてつぶやく、話す、友達の言葉を聞く、喜ぶという繰り返しから自然とインプット・アウトプットができる活動だと思いました。 ・ クイズでは、自分の考えた動物を当ててもらおうと、必死にヒントを出している姿が微笑ましかったです。相手の目を見て話をよく聞く、聞けるよ

			<p>うに話すという会話をする必要性があり、何より楽しく活動できるのが良かったです。そして、隣の人に順にずれていくのではなく、不規則に移動するのが、緊張感もあり、相手をより意識することになったと思います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日々の実践の積み重ねがなにより大事だということを実感しました。
5	教諭 瀬戸口 眸	松ヶ浜小学校	<p>話し合いを通して、子どもたちにたくさんアウトプットさせるためには、教師側がどんなことを子どもたちにインプットさせるか、その内容が大事だということ学んだ。1つのセンテンスを1文全部1まとまりとして1単語のようにまとまりで学ばせることで、中学以降の英語につながっていくのだと思った。また Oh や good などのレスポンスの学びも、会話が弾む、よりたくさんアウトプットへのつなげになるのだということ学んだ。向洋中の実践の中でも、アクティビティの中でたくさんレスポンスが聞かれた。使いたいレスポンスの例をアクティビティの前に黒板に掲示することで、使いやすい工夫もされていた。子どもたちは友達同士の会話の中で楽しみながらレスポンスを使っていた。これが自然に使えるようになることで、会話が弾み、さらなる会話が生まれ、それがアウトプットへの意欲につながるのだと思った。私は特別支援担任で、交流学級での英語しか参加できないが、このレスポンスを率先して行うことで、子どもたちのアウトプットに一躍買えたらと思う。</p>
6	教諭 齋藤加奈子	亦楽小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・子供たちが英語でアウトプットしたくなるまで、ゲームやチャンツを利用して文型や単語をインプットすることが大切であること、ネイティブの英語をたくさん聞かせることなどをこれから意識していきたいと思った。 ・また、英語だけでなく、自分がアウトプットしたことに対して、聞いている人からのリアクションが、自信をもってアウトプットするために、とても必要なことだと思った。うなずき、「good job!」「amazing!」 分からなかった時には「One more time!」「Really?」など、反応することで話すことに抵抗がなくなる。大人も子供も同じだと思う。学級経営にもつながることだと思うが、英語の時間に積極的に意識させていきたいと思った。 ・小学校のうちに、系統立てて同じ表現を何回もアウトプットすることで、自然と文型が単語のように言えるくらい英語のシャワーを浴びせられるようにしたい。
7	教諭 當舎 聖美	亦楽小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の初めから、子どもたちの英語コミュニケーションの授業に対する前向きな気持ちが伝わってきました。英語への期待感と、ALTという生きた教材に対する積極的な態度は、これまで何年も掛けて培われたものなのだと思います。何にも変えがたいこの学習に対する土台は、どの小学校も、どの学年でしっかりと根付いていることがよく分かりました。 ・話し合いでは「アウトプット力」がキーワードとして挙がりました。積極的なアウトプットの土台となるのはやはり、英語への興味関心、英語を話

			<p>すことへの期待感であると思いました。今後、中学校のラウンドシステムとの連携を考えると、「アウトプットを見据えた確実なインプット」が重要になってくるのではないかと思います。低・中学年においては、身体表現を取り入れたり、心地よいリズムにのったりして、何度も繰り返し、コミュニケーションに必要な単語や文型を身に付けていくなど、これまで取り組んできたことを、その目的や方法を、再度丁寧に考えていくことに価値があるように思います。繰り返しの中で生まれる、子どもたちの自信や意欲を見逃さず、ALTの力を最大限活用して、コミュニケーションをとる楽しさや奥深さに6年間浸らせることができれば、英語コミュニケーションとしての取り組みは自ずと、ラウンドシステムに連動していくのではないかと思います。</p>
8	校長 加藤久美子	汐見小学校	<p>① 児童が集中して取り組める教材（大型絵本）に感心しました。絵本の読み聞かせのため、想像上の動物が出てくるもの納得です。児童は、「あの影はドラゴンだね。」「あれは〇〇助のやつじゃない？」など、大人気の『〇〇の〇』もヒントにしながら夢中で取り組んでいました。絵本の続きがあるのかどうかも、とても気になります。始まりから次時が楽しみになる授業でした。</p> <p>② クイズでは、ヒントの作り方（情報の与え方）がうまくて、ヒント1で正解が出てしまうペアもありました。クイズを出した児童は、正解が出てしまった後でも、準備した全てのヒントを紹介していました。多くの児童が、意欲的に情報を伝えよう、アウトプットしよう、という態度で楽しく活動していました。</p> <p>③ 本時は、4のactivityにおいて、T1が次のペアへの指示を出され、全員が新たなペアとクイズに入りました。丁寧に、自信のない児童にとっては必要な時間だったと思います。自信が持てるようになったら、「正解が出たら、次の相手を見つけてどンドンクイズを出していく」という方法にすると、コミュニケーションの機会が倍増するのではないかと思います。</p>
9	教諭 千葉 梢	汐見小学校	<p>Greeting</p> <ul style="list-style-type: none"> ・T1とT2で児童一人一人と挨拶のやり取りをしており、児童全員が伝える時間があり、とても良いと思いました。 <p>Reading picture-story show</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ALTが絵本を読んだ際、かくれんぼの表現に児童から「聞いたことがある」と声が上がっており、意欲を持たせることができていたと思います。 ・児童が自然にALTの真似をして発話する場面が多くあり、普段の授業から英語で話すことが好きな児童なのだと感じました。 <p>Activity</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の授業では、児童同士のやり取りがなかなかできていないので、今回

			<p>の activity は、児童同士のやり取りがありとても参考になりました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3 ヒントクイズの話形が練られており、児童がクイズとして出したいことを ALT に聞きながら考えたのだと感じられました。伝えたいことを英語で表現する意欲を持って活動を行っていました。 ・円形の場の設定では、児童の動きがスムーズで、活動が円滑に進んでいたと思います。デモンストレーションは、円形のため後ろ向きで教員の方を向いていない児童もいたので、円形に移動前にデモンストレーションをするなどの方が全体に伝わるのではないかと思います。 ・生の英語に触れさせるという点では、ALT も activity の活動に参加した方が、児童も ALT と会話することができるのではないかと思います。
10	教諭 関 千紘	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の始まりの明るさや、児童が先生方に反応する「Yes!」「Good!」など、これまでの授業経験の中で培われた力や楽しさが垣間見られ、英語活動を丁寧にご指導されている先生の様子に心打たれました。 ・アウトプット活動も、児童にとって、「必要感」のある内容となっており、相手の出すヒントを一生懸命聞く様子も楽しく拝見させていただきました。 ・本時のキーワードセンテンスである「Who are you are?」「I am a().」は、指導案2の活動から何度も登場していたので、視覚的に提示し、掲示する方が効果的ではないかと感じました。英語のアルファベットを読めない学年でも、リズムで捉えている場合も多く、単語ごとに区切って表示してあげれば、有効な教材になると思いました。また、活動の中でのやりとりをしっかりと押さえることができるので、安心感を与えることにも繋がると感じました。 ・指導案表記「活動2」と「活動4」がアウトプットの設定だったので、活動時間を充分にとっていらっしゃるのが伝わってきました。(活動2が17分くらい、活動4が11分程度だったかと思います。) 「活動3の単語や文の練習時間」は、インプットの時間とあり、活動時間も4分程度でしたが、今回の授業では、「活動2」よりも、この単語練習の方にも、たっぷり時間をかけてもよいかと思いました。特定の児童が中心の発話量となる活動2よりも、単語や文の練習の方が全体の発話量に繋がる活動なのかと感じました。 <p>参観させていただいた内容を生かし、今後も授業作りに励みたいと思います。</p> <p>ありがとうございました。</p>
11	講師 前田 環	汐見小学校	<p>Greeting で個別に「Hello! 「How are you?」をすることで、外国人に対して気軽に返答する習慣ができるのがいいと思った。自信がない子でも、一対一でだと逃げ場がないと思えば、思い切ったジェスチャーや返答ができ、将</p>

			<p>来海外に出たときに参考になるのではないかと思った。英単語が自然に出る習慣がつくのは理想的と思う。</p> <p>ジェスチャーが大きい子は表情がみな明るく、表現力があると思う。</p> <p>とても新鮮な授業でした。</p> <p>ありがとうございました。</p>
12	教諭 土井 康義	七ヶ浜中学校	<p>参観のみでした。</p> <p>明るく、楽しく、面白い授業でした。</p> <p>生の英語が児童に浴びせられ、たくさんの発話量であふれていました。</p> <p>T 1, T 2の役割分担がはっきりしており、日頃から何度も打合せをしているのだろうと想像できました。</p> <p>Play activity. では、話すことと聞くことがしっかり確保され、英語を通したコミュニケーションが、活発に行われていました。コミュニケーション力の育成を目指した授業であると感じました。</p>
13	教諭 森 妙子	七ヶ浜中学校	<p>・小学校3年生の授業を参観させていただきましたが、児童全員が体を乗り出して前のボードを見ようとしたりALTの指示をしっかりと聞こうとしたり、興味をもってとても意欲的に授業を受けている様子が見られ驚きました。また、誰かが発言したときに、それに対して自然と拍手をしたり声を掛けたりしている様子から、コミュニケーション能力を身に付ける上でも英語コミュニケーションの授業が大きな役割を果たしているのだなと思いました。そして、小学校から英語を感じる環境があることで、英語に対する抵抗感も薄れ、自然に英語に触れていけるのだなとも感じました。</p> <p>・中学校になると入試に対応した授業内容も必要になると思うので、その引継ぎの要素も必要となるであろう小学校6年生ではどのような授業になるのかも、ぜひ参観したいと思いました。</p>
14	主幹教諭 笠原 洋平	向洋中学校	<p>授業を参観させていただき、大変感謝しております。</p> <p>中学校の英語科の取組を見ていて、コミュニケーションに対する抵抗が全くないことが素晴らしいと思っていましたが、このように小学校の取組がしっかりなされているからこそだと改めて確信しました。</p> <p>授業についての感想を何点か書かせていただきます。</p> <p>1 子どもたちの様子</p> <p>授業開始まで数分間齋藤先生と待っている様子からして、日頃から英語の授業を楽しみにしているのがよくわかりました。Nathanielが入ってくるやいなやテンションがさらに上がり、自然にあいさつの声が出て、パフォーマンスゼスチャーが始まりました。理想だと思いました。</p> <p>2 授業について</p> <p>あいさつの表現もしっかり定着しており、物怖じしないでしゃべることができていました。Reading picture-story show「Who are you?」では隠れ</p>

			<p>ている動物を探す楽しい活動でした。少し長いかなあと感じましたが、キーワードを繰り返ししゃべり、印象づけるにはやはり必要な時間だったと感じました。掲示した絵はもう少し大きいと後の児童が見やすいと思いました。Words and sentences practice はとてもテンポ良く進められていました。動物のカードがラミネートコーティングされたことで角度によってはライトが反射し後からは光って見えない状態もあったので注意された方がいいと感じました。Play activity では何の動物かヒントを出して当てる試みでした。特徴となるヒントを上手に相手に伝えることが結構できていました。今後力となる活動だと感じました。Feedback time&Greeting ではいい表現をしていた児童が褒め称え合う場面が次回への意欲につながると感じて見させていただきました。本当に勉強になりました。ありがとうございました。</p>
15	係長 稲妻 和久	町教育委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・導入での一人一人に対する会話も良いなあと感じた。(皆一斉にという挨拶が多かったが。) ・全員が授業に参加していた。よく声が出ていた。 ・英語を通して自分の頭で考え、自分の言葉で意見や考えを伝え合える力を身に付けさせるためにいろいろなアプローチと工夫が必要になってくると思います。よろしくお願いします。
<p>【七ヶ浜町立松ヶ浜小学校】 授業Ⅲ 5年2組 Nathaniel Hazel Stuart (T1) Lin Rebecca Yang Xi (T2) 岸 美瑞保 (T3)</p> <p>令和2年11月11日(水) 「道案内をしよう」</p>			
1	教頭 新田 聡	松ヶ浜小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・本校2年目のHRTによるクラス作りはとても丁寧で、その特徴が英C授業作りにも表れていると捉えている。道案内を題材とした今日の授業でも、ALTを2人起用し、少人数でのcommunicationを意図していた。 ・全体としてoutputの量は多くなかったように感じた。Rebaccaが話していた通り、子供同士の指示に対する反応に迷いが見られたことから、よく聞こえなければ繰り返すようお願いするなどのやり取りのスキルを取り入れておくことによって、2往復以上のより深いcommunicationを積み重ねることができるようではないかと思う。一方で、ベースにある子供達同士の関係性と場面の必要性から、グループで協力する場面も特に後半に見られたことから、少人数で行う意味についても確認することができた。 ・outputとinputの間にあるresponseの必然性を高めたactivityの仕掛けが今後取り組む上でのpointになると気付くことができた。
2	主幹教諭 折居 晃弘	松ヶ浜小学校	<p>同じ日にALTが3人配置されている利点を活かし、ALT2人と担任による3人で指導を行うことで、アウトプットの量を増やすことができていたように思う。実際に道案内を行うという場面設定も、必要性が感じられた。何のために行うのかという目的意識がはっきりしているほうが意欲的に学</p>

			習できる。道案内だけを行うのではなく「Excuse me.」や「You are welcome.」など反応を返すことも、アウトプットの量を増やすことにつながる。気さくに、英語が自然と口から出てくるような雰囲気づくり（学級づくり）も英語コミュニケーション科を進める上で大切だと感じた。
3	教諭 長澤亜紀子	松ヶ浜小学校	<p>○授業の準備素晴らしかったです。準備大変だったと思いますが、子どもたちが、実際に自分で動いてみることで、道案内の仕方がより身に付いていくのだと感じました。</p> <p>○広い場所なので、3つの場所を設けて活動できていたので、全員が時間の中で活動することができていました。活動によっては、教室を出て様々な場所で、場を設定すると、活動の幅が広がってくるのだと勉強になりました。</p> <p>○話合いのときには、レスポンスについて話題になっていました。英語コミュニケーションの力を高めるために、ぜひクラスでも少しずつ取り入れていきたいと思いました。</p> <p>ありがとうございました。</p>
4	教諭 齋藤 美穂	松ヶ浜小学校	<p>場の設定がよく、広い空間を使って、パイプいすのしきりで道をイメージして実際に動くようにしたことで、説明する側も教えてもらう側もとまどうことなく活動することができていました。</p> <p>また、途中からレベルを上げて、通れない道を作ったアイデアも子供たちを飽きさせない工夫だと感じました。</p> <p>HLTが、場の雰囲気を盛り上げるような声掛けを行うことで、子供たちも少しずつ声が出るようになってきたと思います。このくり返しが、大事なんだと改めて感じました。</p> <p>主にレベッカ先生のグループを見ていましたが、どの子も「Go straight」「Turn left」などすらすら説明できていたことに驚きました。ここに至るまでの学習で子供達が楽しみながら身につけていったのだと感じました。</p> <p>子供達はとまどうことなく説明できていたのですが、実際に説明するとなると同じ向きになって説明すると思いますので、機会があれば、ペアなどで同じ方を向いて説明する活動も良いのではないかと思います。</p> <p>大変参考になりました。ありがとうございました。</p>
5	教諭 千葉 淑美	松ヶ浜小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・準備や場設定の確保がいつもの授業だと難しいが、年に何回か体育館やALT 2名の活用があると児童の興味関心度が高まりよいと思いました。 ・左右や前後ろなどのことばに合わせて体を動かすのは活動としてよかった。さらに、ことばと同じ、ことばと反対、指導者の間違ったジェスチャーにつられずにやるなどバリエーションがたくさんあってよかったです。 ・間違えさせる活動もよいと思いました。

6	教諭 工藤理恵子	亦楽小学校	<p>(参観させていただいて)</p> <p>○HLT と ALT 2 名の計 3 名体制での学習で、3 班に分かれてアクティビティができた。そのため、全員が案内役と聞き取り役を経験することができ、活動量は十分だったと思う。</p> <p>○案内役は、相手の立場同様に体をひねり、右・左を判断し、道案内をしていた。「質を上げるポイント」「評価」にある通り達成できたのではないか。</p> <p>(話し合いに参加して)</p> <p>○目指すところであるアウトプット力を高めるには… 必要感のある題材設定、しっかりしたインプット！（たくさん聞かせる）</p> <p>○より豊かなコミュニケーションのために… 会話のつながり、レスポンス（nice!good!だけではなく really?once again などもある）を指導していく。これは、現在努めているところなので、意識して指導していきたい。really?once again!など広げていきたいと思った。</p> <p>○「英語コミュニケーション科」の成り立ち、「なぜコミュニケーション力を身に付けなければならないのか」ということを理解して、これからも「英語コミュニケーション科」を指導していこうと思った。</p> <p>世の中がグローバル化した現代で（子どもたちが）将来にわたって生きていくために。</p>
7	教諭 文屋 優友	汐見小学校	<p>①子供の様子</p> <p>普段からとても良い子たちなんだろうなあと感じた。声は低いですが、傾聴の姿勢があり、指示されたことに素直に行おうとする様子を感じた。担任の先生が楽しそうに体を動かすと自然と笑顔になるし、声の音量も上がるので、担任の先生が大好きなことを感じた。</p> <p>②授業について</p> <p>前時の振り返りを体育のようなゲームで行っており、混乱を楽しんでいる様子だった。先生も失敗して大笑いしている姿から、失敗を楽しむ姿勢が育てようとするのを感じた。</p> <p>体育館に建物に見立てたパイプイスがたくさんあり、大変な準備をされたんだろうと思った。できるだけリアルでライブ感をという授業者の思いが感じられた。</p> <p>聞く・話すが一人数ひとりに確保された、入念に計画されたアクティビティだと思った。また、3つのグループに分けて、ALT が1人で子供に指示し、活動する様子は新鮮だった。普段からの積み重ねがあつてこそだと思</p>

			<p>う。英語がわからず、担任を見つめ頼ってしまう自分のクラスにぜひ見せたい。</p> <p>③検討会から</p> <p>子供同士の微妙な英語の関わりあいを増やすべきか、ALTの本物の英語を浴びせるべきか、40分、高学年という発達段階から悩んでいた。また、スパイラルの学習といっても、レベルの上がりを意識した授業づくり、思考を伴う英語Cとはと考えていたが、須藤校長先生の、①原点は七ヶ浜の子供を英語で元気にすること②思考力・表現力を考え始めると、子供の英語の財産を損なうというお言葉から、今後の授業をさらに考える良い機会となった。</p>
8	教頭 酒井 智紀	七ヶ浜中学校	<p>ALT2名、担任1名の3人体制で行う授業がどのような形となるのか楽しみにしながら参観させていただきました。</p> <p>まず、学級の授業規律がしっかりと確立されており、話を聞く姿勢や問いかけに対する反応など普段の指導がしっかりと行き届いていることに感心しました。また、授業全体でのお2人のALTと担任の先生の連携がしっかりとできていた点など、英語C科のこれまでの取組の成果が授業の様子にあらわれていました。</p> <p>質を上げるポイントとして提示されていた「量を増やすためのグループ活動」と「質を高めるためのALT、HRTの配置の工夫」が授業の中にきちんと位置付けられていた点もすばらしいと感じました。</p> <p>たいへん参考になる授業をありがとうございました。</p>
9	教諭 吉岡 優	七ヶ浜中学校	<p>授業準備や指導案作成など、ご苦労様です。</p> <p>授業参観させていただき、ありがとうございました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・導入や終結の場面でのあいさつ等のやり取りがスムーズに流れていて、繰り返し行うことで定着が図られているのだと思いました。 ・3グループに分かれて活動を行う際、道を歩く人役の児童の待ち時間が長いと感じました。児童が楽しく学習活動に取り組めるようにもう少しテンポよく進めるといいのかなと思います。 ・小グループで道案内をするときに、児童がある程度、定型文で話せるようになったら教師の支援を減らしていき、誘導がなくても話せるようにするとレベルアップが目指せると考えました。 ・道を歩く人役が間違えて違う道に進んだとき、児童が大きい声で言い直して一生懸命伝えようとする姿が印象的でした。伝えようとする意欲や伝わってほしいという気持ちを引き出すための仕掛けがあるとより意欲的に活動できるのではないかと思います。
10	教諭 大橋 智江	向洋中学校	<p>授業提供ありがとうございました。</p> <p>体育館での授業ということで、どのように授業が展開されるのか楽しみ</p>

			<p>にしていました。以下に私自身が感じたこと等を挙げたいと思います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メインの活動で、活動場所を3カ所に分け、それぞれのグループの中で、案内する生徒と案内される生徒を全員が経験できていた。楽しく授業を受けていた。 ・英文と動作を一致させており、体で覚える練習が出来ていた。 ・活動の後半で、障害物を設定することで、活動に刺激がでて、生徒同士で「どうする？」などと相談している姿が見られて良かった。 ・10時間扱いの9時間目ということではありましたが、前後にどのような活動があったのか興味がありました。 ・for two blocks や on your left(right)などの表現も上手に使える生徒が多く、驚きました。中学校でも各学年で道案内の単元があるので、小学校でどの程度の表現を学習しているのか、しっかりと確認することで、小中のつながりを意識した授業展開が見込まれると思いました。 ・ホワイトボードの文字がもう少し濃いとさらに見やすいと思いました。 ・生徒1対1の活動があればさらに生きた会話が聞けたかと思いましたが、コロナ対策上、難しかったのかと思いました。 <p>小学校高学年の英語コミュニケーション科の授業を参観させていただき、中学校の授業を進める上で知っておかなければならないことについて、再度中学校英語科で話し合いを持ち、小中のつながりを意識した授業を計画していきたいと思いました。ありがとうございました。</p>
11	教諭 田代 渉	向洋中学校	<p>授業提供お疲れ様でした。実際に体を動かしながらの「道案内」の授業で、見ていた方も大変楽しい内容になっていたと思います。また、体験の時間が十分に確保されており、実生活にいかせる授業になっていたと思います。また、障害物を用意するなど道案内の難易度をあげるなどの工夫もあり、子供たちも楽しそうにコミュニケーションを取っていました。マスク着用のため、声が聞き取りづらいところもありましたが、全員が復唱していたため、聞き取れないということにはなかったのもよかったと思います。本時の目標である「英語でコミュニケーションをする楽しさ」は感じられていたと思います。一方で「自分の思いを表現したりして相手を様々な視点から理解しようとする」という目標は、達成できたかどうかの基準が難しいと思いました。(何ができたら目標達成か、私はこの目標からは理解できませんでした。)</p>
<p>【七ヶ浜町立汐見小学校】 授業 I 特別支援学級 Lin Rebecca Yang Xi (T1) 谷地森 優花 (T2)</p> <p>令和2年11月10日(火) 「オリジナル動物園を作ろう。」</p>			
1	教諭 小林枝里香	松ヶ浜小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・特別な支援を要する児童の実態を踏まえながら、様々な工夫がされていた。 ・朝の会 in English では、毎日の習慣が積み重なっていることによって、様々

			<p>な質問にも、自信をもって答えている様子が見られた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「Checking today's activity」では、本時で行うことの確認をすることで、目的意識や見通しをもって、活動に参加できるようになった。 ・「Reviewing Words」では、動物の名前を言いながらジェスチャーをすることで、体の動きと動物の言い方を楽しみながらインプットしていた。時間に余裕ができ、タッチゲームを入れたことで、児童たちも飽きずにやっていた。 ・メインとなるアクティビティでは、はじめに、T1・2で大きな動きで分かりやすいデモンストレーションだったので、児童もスムーズに動いていた。待っている児童には、他の先生たちがメニュー表を見せて、練習させていたのがとてもよかった。 <p>集める動物カードは、コーナーごとに分かれていて、ワークシートも分かりやすかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カードを集めた児童は、「ぼくはこの動物だよ。」などと、自然とコミュニケーションが生まれていた。
2	校長 加藤久美子	汐見小学校	<p>①T1やT2以外の担任から、個々の児童の困り感に寄り添った指導・支援が見られ、多くの児童が達成感を味わうことができていると思います。</p> <p>②英語によるコミュニケーションに苦手意識を持っている児童の成長が見られました。本時はもとより、T1のリズムよい授業で学びを繰り返しているからこそだと思います。</p> <p>③話し合いにおいて、それぞれの担任の「気づき」を共有できたことは、大きな収穫です。明日からの英語コミュニケーションの授業にすぐに取り入れていけるものばかりでした。</p> <p>④障害種による実態、学年が異なる20名を対象とした英語コミュニケーション科の授業について、しっかりと検証をし、個別の指導計画を評価・改善していく必要があると思いました。</p>
3	主幹教諭 高橋 心	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・授業づくりに向けての熱心な話し合いが、定期的に特別支援部で行われていた。児童の障害の特性に配慮した活動を常に検討し、協働的な授業づくりを実践していた。 ・特別支援部の先生方の役割分担が明確で、本時では先生方全員で、子供たち全員の指導にあたる姿が見られた。 ・動物名の英単語の繰り返しの練習では、動物の名前を聞いたとたん、児童の体が動いていた。動物の動きを真似しながら練習するなど、ある程度自由な雰囲気の中で行うのも良いと思った。 ・自分の好きな動物を選ぶ場面では、指導者の目をしっかりと見て、はっきりと動物の名前を伝えることを大事にしていた。互いにコミュニケーションをとっていき際の大事な部分であると感じた。

			<ul style="list-style-type: none"> ・学習活動の中で、児童の障害の特性を配慮した上で、ある程度自由に動き回って発表する場面があっても良かったと思う。ALTや先生方、友達との自然な関わり意図的に増やし、子供たちのコミュニケーションを今以上に高めていきたい。
4	教諭 山口 良之	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・全ての児童に活動の機会を与えることができた流れになった。 ・特別支援学級として全員で行うメリットと同時に、学年や発達段階・障害の種類や軽重の異なる児童が同じ空間で学習活動を行うデメリットについても改めて振り返ることができた取り組みだった。 ・高学年を生かしたデモンストレーションも取り入れたかった。 ・全員で行う「振り返りの場」の設定は、意義と効果について確認できた。質問（投げかけの言葉）は、慣れも必要だが様々なパターンがあっても良いと思った。 ・コミュニケーションの活動なので、T1・T2とのやり取りだけでなく、児童同士の（本時の内容でいえばできた動物園を互いに見せ合う場面）を重視するアプローチもあれば、面白かったと思った。
5	教諭 中嶋 紀恵	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子ども全員がALTとコミュニケーションを図る場を設けることができた。 ○ 繰り返し取り組んできた英語による朝の会では、自信を持って話すことのできる英語が増えてきた。 ○ 発表の場面で、T2が「自分と同じ動物園を作った人はいるかな？」のような聞き方の指示を出すと、コミュニケーションを楽しむというねらいにさらにせまることができたのではないかと思う。 ○ 1～6年生が在籍する特別支援学級では、今後、学年の実態に応じて目指す姿を明らかにし、授業構成を考える必要がある。
6	講師 前田 環	汐見小学校	<p>特別支援の英語は、年齢が関係なく、同じ条件で度胸があるかどうかで変わるのだと思った。知的障害があっても、知っていることと自信をもってALTとの会話ができるかで、英語を楽しむことができていた。</p> <p>よく聞く英単語（動物）だったので、教材もよかったと思う。視覚に訴え、学習だけでなく作品として動物園を作るという、英語以外の学習も取り入れており、特別支援ならではの学習になったと思う。</p>
7	教諭 井上 和香	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・単元の3時間目ということもあり、難しい動物の言い方も発音に気を付けながら意欲的に話す児童が増えた。 ・単元計画をしっかりと見通した上で本時の活動やアクティビティに臨んだので、授業の流れやアクティビティのやり方も定着し、スムーズに進んだと思う。 ・発表の場面で、全員が自分のオリジナル動物園の紹介ができたのは良かった。人前で話すことが苦手な児童も、緊張しながらもしっかりと英語で話

			<p>すことができた。チャレンジの場や頑張りを認め励ます場をこれからも大切にしたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達の発表を聞く観点を明示して同じ動物を選んでいたら「Me,too!」と言わせたり、「Nice!」「OK!」といったあいづちを返したり、コミュニケーションのツールとして今後身に付けさせていきたいなと感じた。
<p>【七ヶ浜町立汐見小学校】 授業Ⅱ 4年2組 Kevin Alexander Blake (T1) 関 千紘 (T2)</p> <p>令和2年11月10日(火) 「Do you have a pen?」</p>			
1	校長 和田 祐子	松ヶ浜小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・発話量が多く、楽しみながら基本の表現や単語に慣れ親しむことができる授業でした。アクティビティの工夫とテンポの良さにより、繰り返しの練習も飽きずにでき、コミュニケーションの要素も随所にあっただので、「関わって学ぶ楽しさ」「会話することによって分かる楽しさ」が感じられました。 ・授業の質を上げるポイントとして Small Talk を取り入れ、既習の表現を用いた会話をペアで行うことで、活きたコミュニケーションとなっていました。このような短時間での会話の積み重ねにより、自分の引き出しが増えていく手応えや会話が成立した喜びを実感できると思います。 ・最後の方に行ったインタビューでは、徐々にボランティア希望者が増えていきました。単にやり方をつかんで自信が付いただけでなく、全体を相手にやり取りする楽しさが浸透していった結果だと感じました。もう一工夫加えるとしたら、「〇〇なイメージのペンケースです。」「〇〇の活動で特に便利なペンケースです。」などとヒントを出して、それを基に周りが考えるようにすると、考えて話すコミュニケーションにつながると思います。 ・相手意識を持たせたコミュニケーションという点から、プレゼントとして文具を選ぶ時点で相手に合わせたコンセプト等も工夫できるかなと思いました。
2	教諭 川原田千春	松ヶ浜小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・発話量の多さが印象に残りました。話す機会を増やすことで、子ども達の声も大きく、自信を持って話していたと感じました。 ・Activity も相手意識、目的意識がはっきりしたものと思いました。後半、前に出て筆箱の中身を当てる活動も、質問や答え方を何度も言うことができ、楽しさと発話量と兼ね備えた活動でした。 ・初めにゴールを示すことで、児童は見通しをもって活動することができたと思います。 ・Small talk も日頃の実践が見られ、子ども達がスムーズに会話をしていたのが、すばらしかったです。繰り返して話すことの大切さを改めて感じました。 ・単語の練習の時で、Kevin 先生の教え方がとても良かったです。抑揚の付け方やリズムを工夫し、テンポ良く単語を言うことで、子ども達もあきずに、練習することができていました。また、単語が不明瞭なところはすかさず戻

			<p>って繰り返していたので、クリアな発音になっていました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し合いでも、振り返りの仕方が出ていましたが、チャート用紙というのが興味深かったです。単元を通してその変容を見ることができるのが、良いと思いました。 ・とても刺激を受けた参観・話し合いでした。今後、自分の授業でも実践していきたいと思いました。
3	主幹教諭 大内 理恵	亦楽小学校	<p>関先生とケビン先生の実践から感じ取った授業の精度アップポイント</p> <p>○授業のリズム感</p> <p>身に付けさせたい英単語・英文をたたみかけるように緩急をつけながら何度も繰り返し唱え、定着を図っていました。また、児童を飽きさせないように、活動を切り替えながら繰り返し広げられる展開によって、集中とおもしろさを持続させていました。</p> <p>○発話量の確保</p> <p>T1とT2がどこで、どれだけ児童に発話させるのかを綿密に打合せがなされていました。児童が英語で話す時間がたくさん確保されていました。</p> <p>○ねらいとゴールの明確な提示</p> <p>この学習を行うと、どんなことができるようになるのか、児童に夢を持たせて取り組ませていました。そのことによって児童は目的意識を持って授業に臨んでいました。</p> <p>○コミュニケーション力の育成につながる small talk</p> <p>中学校の英語科に確実につながる実践でした。復習や習熟を兼ねて、既習事項が児童自身の財産になり得ることを感じました。</p> <p>○自己の成長を振り返るワークシート</p> <p>チャート式で、単元を通して自分の取組の様子や成長が分かる工夫がありました。また、短時間で取り組めるよさがあると思いました。</p> <p>参観から考えた私の授業づくり</p> <p>① 2つの視点での振り返り</p> <p>ア 友達やALTとあたたかいコミュニケーションができたか。 自分の伝えたいことを分かりやすく伝えられたか。相手の伝えたいことを聞いて理解できたか。</p> <p>イ 知的欲求を満たせたか。 新しい知識が増えたか。学んだことを使えるようになったか。 授業によってアとイの組み合わせを評価に取り入れていき、1時間又は単元全体の学びの<u>価値</u>を自覚し、学級全体で<u>共有</u>し合うことが連続性のある質の高い学びとなると考えます。</p> <p>② 「あたたかいコミュニケーション」</p>

			<p>どんなコミュニケーションができる子どもを目指しているのでしょうか。それぞれの担任は、目の前の児童に期待と信念を持って指導しています。私は、その中でも小学校の取組で大切なのは「あたたかいコミュニケーション」だと考えます。</p> <p>1年生の「コミュニケーションマスターになろう」の取組は、自分と相手とのやりとりが双方向に進むコミュニケーションを行うためにもとても有効な取組です。継続していくことで強みになると思いました。</p> <p>例えば1年生と4年生で取り組んだ授業に、さらに、あたたかいコミュニケーションを入れるとどうなるか、想像してみました。</p> <p>・1年生…みんなでコミュニケーションして満足感たっぷりのコンプリート</p> <p>最終的に投票による動物人気ランキングを決めて、動物園を完成させました。その時に、自分の選んだ動物が動物園の中に入って無くてさみしそうにつぶやいた児童がいました。英語で言えた自分の好きな動物。ランキング外となってもみんなで動物園の中に入れて完成させる。みんなで英語を話してつくりあげたうれしい動物園となるのかな、と思いました。</p> <p>・4年生…やりとりの中に「思い」プラスする、心のあるコミュニケーション</p> <p>筆箱の中身（文房具）をプレゼントする活動でした。児童は、どんなことを思って選ぶのでしょうか。そこに相手意識が働きます。</p> <p>メインの活動で、プレゼントされた人が何を持っているか質問をしていきました。4つの文房具を当てた後、プレゼントした人がどんなことを思って選んだのかを話してもらった場を設け（これは日本語でいいでしょう。）その思いをみんなで聞きます。それによって、自然と「Good present!」「Nice present!」と言ってあげたくなる。やりとりの中に思いをプラスすることで、さらに心地よいコミュニケーションが生まれると思いました。</p>
4	講師 今野 守	亦楽小学校	<p>参観から私は、授業を楽しく行うには授業者がいかに授業を楽しく行っているのかということが児童の姿に反映させていると考えた。</p> <p>話し合いでは、発話量が話題に上がった。ケビン先生は授業のテンポが良く多くの学習活動をこなしていた。そのため、多くの活動を時間内にこなすことができている。発話量が多く、児童同士が話し合う場面も多く確保されていた。そのため、英語が児童の頭に残ると私は考えた。いかに発話量を増やしていけるかという観点から授業をしていくことも大切だと思う。また、ケビン先生の発音のリズムを変化させることや動作を付けることを通して児童が飽きさせないような工夫をしており、英語だけでなく実践していけるよう</p>

			<p>にしたい。</p> <p>他にも振り返りの仕方に関して、私の授業では、多くの活動の際の振り返りを書くことを通して行っていたが、今回の話し合いを通して単元の最後にまとめて文章で書かせることの重要性に気が付くことができた。英語の活動の時間を確保するために話すことを重視させてしっかり理由まで話させるという観点が大切になると考えた。</p> <p>既習事項を確認させる時間の確保の重要性を学んだ。汐見小さんではスモールトークという時間を確保し、既習事項の確認を行うことをされているときき、この取り組みは中学校までつながっていくと感じたし、児童の学習の自信をつけさせていく手立てにもなるのではないかと考えた。これから既習事項の確認を上手く授業の中で活用していきたい。</p>
5	校長 加藤久美子	汐見小学校	<p>① T1とT2の息がぴったりで、テンポよく楽しい授業でした。</p> <p>② 単元の終わりの活動をイメージさせたことで、児童は「何を学ぶのか」を意識して授業に臨むことができました。</p> <p>③ T1が各所で音楽的リズムに乗せた Practice を繰り返し、児童はまるで歌を歌うかのごとく、表現を身に付けることができました。</p> <p>④ 振り返りチャートは、本時の振り返りのみならず、これまでの自分の成長を振り返ることができ、次時へのさらなる意欲付けともなっていました。低・中・高と、それぞれの段階に合わせた振り返りがスムーズにステップアップしていくよう、校内で共有できればと思います。</p>
6	教頭 坂内 信彦	汐見小学校	<p>・授業全体を通して流れる楽しさの中に、学習に対する真剣さと授業のねらいを意識した展開が感じられた。</p> <p>・T1とT2の役割分担が明確であり、これまでの実践の積み重ねからくる本町職員の授業レベルの高さや安定感、落ち着きを感じた。</p> <p>・子供たちにとっても、40分間というタイムテーブルの中で無駄を省き、ポイントを絞った学習内容による濃密な学びの時間であったと感じた。</p> <p>・授業の展開の中でリズム音を使って児童に発話させる場面があり、展開にメリハリがついていた。リズム音を数パターン用意することにより、取り扱う内容やねらいによって使い分けられると感じた。</p> <p>・チャート式の学習カードを使った「振り返り」は大変効果的であったが、何の為に授業を振り返るのか、振り返ることによってどんな効果があるのか、という観点を子供たちに与え続けていく必要があると感じた。</p> <p>※話し合いの中で高学年部から出された「これからの時代に合うコミュニケーション能力とは何か？」については深く考えさせられた。ICT化が進み、生活様式が変わってきている中で、これからのコミュニケーション能力とはいかなるものかを考えて行かなければならないと感じた。</p>

7	主幹教諭 高橋 心	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・子供たち一人一人が、次に何をやるか分かっていて、積極的に学習活動に取り組んでいた。普段の英語コミュニケーションの授業が、真剣に、そして意欲的に行われていることが想像できた。 ・単語の繰り返しの練習でのリズム、立ったり座ったりして飽きさせないチャンツ、ペアや全体で行ったアクティビティなど、どの活動においても、リズムとテンポがあり、子供たちが楽しみながら活動していた。これらの活動を全員が楽しめて、最後までスムーズに行われているのは、しっかりとした規律のある学級づくりが行われていることが伝わってきた。 ・スモールトークの設定がとても良いと思った。これまで学んだフレーズ、単語を、ゲームを取り入れながら進めていくので、子供たちは笑顔で楽しみながら活動していた。既習内容ということもあり、隣の友達とのコミュニケーションも自然と図られていた。また、1学年から6学年まで、スパイラル的に内容を繰り返す上で、4学年での内容を繰り返しながらしっかりと身に付けることはとても重要であると感じた。 ・振り返りでは、「楽しかった。」「それはなぜ?」と一歩踏み込んだ質問をしていくことで、子供たちのコミュニケーションにも触れる内容がどんどん引き出されてくると思われる。
8	教諭 熊谷 宏晃	汐見小学校	<p>①授業のゴールが見えている授業であるので、子供たちが何を学べばよいか理解している授業であった。</p> <p>②Kevin 先生の子供に対応する指導の仕方が良かった。飽きるということではなく、興味、集中ができるような授業ができていた。</p> <p>③レーダーチャート式の振り返りシートの活用は有効的であると感じた。児童が次時の自己評価を比べ、自分なりの評価ができること、短時間で評価ができることが良い。</p> <p>*他の学校では、40分授業の中で、どのような評価、評価時間を確保しているのかの検討もあってもよかったと・・・</p>
9	教諭 熊谷 宏規	汐見小学校	<p>①授業の最初に単元の最終目標を子どもたちに示し、そのために今日の授業では、何を学ぶのかをきちんと伝えたことで、目的を持って子どもたちが授業に取り組むことができた。</p> <p>②ALT の Kevin 先生がリズムカルに Practice を行っていたことで、子どもは飽きずに集中力を持って授業ができていた。</p> <p>③スモールトークで既習事項をスパイラル的に学習できるのは、とても良い。中学校につながっていくので、学校全体に広げていきたい。</p> <p>④40分の授業の中で振り返りをどのように行うかが課題。現在は、中学年部でレーダーチャート式の振り返りシートを活用している。</p>
10	講師 水野 充	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・参観・話し合いから考えたこと <p style="text-align: center;">この授業を通して、ケビン先生と関先生の授業のバランスがしっかりし</p>

			<p>ていること,ケビン先生のテンポの良い授業と関先生のちょうどいい解説が生徒の理解とモチベーションを高め,会話量の多い授業ができたのではないかと考えた。</p> <p>隣のクラスの担任としてケビン先生のテンポは,自分のクラスの児童もノリノリで授業を受けている。しかし発音がわからない・英語がわからない児童のりはいまいち良くない。関先生のクラスは、それが見られずに全児童が懸命に何かを取り入れようとしていた姿が見られた。</p> <p>・話し合いから気づいたことは,どの先生もテンポの良さや評価の仕方に共感を得ていた。それを踏まえて,関先生をモデルとして毎回の授業で,時間内にできるようにするタイムマネジメントと授業評価を時間内にしっかりと取り入れる。評価を細かくできるように英語の授業で毎回「どこがたのしかったか、なにがよかった。」と言える児童を育成するべく普段の授業や宿題の日記,他の教科でのふりかえり等で活用して,児童を見ていきたいと思った。</p>
11	教諭 浅野 航大	向洋中学校	<p>・授業の最初に本時のねらい（何をやるのか）を、黒板に貼ることで、明確に示しており、児童たちが見通しを持って学習に取り組むことができていると思います。他にも本時の流れを一覧することができるホワイトボードなども用意されていて、本単元の主点である「活動の明確化を図る」について達成できていたように感じました。</p> <p>・カードや音楽、身振り手振りなど児童を飽きさせない工夫が随所に施されており、児童たちも楽しみながら意欲的に活動に取り組んでいたのがとても印象的でした。ケビン先生の良いテンポに関先生が補助することで、児童も混乱することなく活動に取り組めていたと感じます。</p> <p>・40分間を通じて児童たちが繰り返しフレーズを練習することができており、児童たちの発話量に驚きました。そして、その発話量を苦に思うようなそぶりを全く見せず、本当に生き生きと楽しみながら活動に取り組む児童の姿に感動しました。日々の授業の成果がこのようなようになって現れるのかと大変勉強になりました。また、何度も繰り返し練習することの大切さについて改めて気づかされました。私自身、科目は違いますが、この授業で学んだことを1つでも多く自らの授業に生かしていきたいと思います。授業を参観させていただきありがとうございました。</p>
12	課長 佐藤 浩明	町教育委員会	<p>リズム良く、同じ単語や例文を繰り返し、自然に耳に残り、学べるということを感じた。何を学ばせたいかや授業展開の順番も明確なので分かりやすかった。英語コミュニケーションにとって重要なことは、リズムやテンポだと実感できた。</p>

			また、ボディランゲージや動きを加え、子供たちを飽きさせない工夫がされており、無意識に楽しい授業であった。
13	係長 稲妻 和久	町教育委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・チャンツ、黒板表示、テンポなど、様々な工夫で発語ができており、児童は楽しく授業に参加している。 ・子供を飽きさせない工夫があった。 (トントングッドジョブ、ナイスペンシルケースなど) ・子供たちには自然な英語の発語があった。 ・コミュニケーションの面でも、1対1、1対他児童など工夫があり、児童も集中して取り組んでいる様子であった。 <p>※楽しませる、飽きさせない工夫をすることは、大変だと思います。英語コミュニケーションを通して、自分の頭で考え、自分の言葉で伝え合う力をつけてあげられるよう力を注いでいただけたらと思います。よろしくお願ひします。</p>
<p>【七ヶ浜町立汐見小学校】 授業Ⅲ 1年1組 Lin Rebecca Yang Xi (T1) 本木 真理子 (T2)</p> <p>令和2年11月10日(火) 「What animal do you like?」</p>			
1	講師 金井 実央	松ヶ浜小学校	<p>本木先生の、子どもと目を合わせて気を配りながら授業を展開していく様子がすごく感じられた授業だった。</p> <p>コミュニケーションマスターの4観点「nice/good」「me too!」「help me!」「repeat」はぜひ児童の実態に合わせて今後、取り入れていきたいと感じた。友達の発言に、リアクションをとるとというのは、コミュニケーションの第一歩だと改めて気づかされた。会話のきっかけとして、まずは英語でのリアクションがあふれる授業をステップとして組んでいきたい。非常に学びになった。</p> <p>振り返りの時間に、毎回「ビンゴゲームで2回ビンゴになったから、楽しかった。」など主観的な感想しか児童から出せないことが悩みであったが、本木先生は感想の書かせ方として、「できるようになったこと、ともだちのいいところ」とあらかじめ観点を絞っていて、より振り返りも充実してくるのだと感じた。</p> <p>話合いでは、レベッカ先生からネイティブでよく使われる英語のリアクションを教えていただき、学年や学級の実態に合わせて授業に取り入れていきたいと感じた。</p>
2	教諭 文屋 紀子	亦楽小学校	<p>○考えたこと</p> <p><コミュニケーションマスターについて></p> <p>“コミュニケーションマスターになろう”の反応の英語表現を取り入れ、やり取りの中に温かさが出てくると感じた。また、いつも自分たちが日本語で話しているときに、「うんうん」「同じです」「もう一回いいですか？」などと</p>

			<p>反応していることを、英語でも取り入れ、やり取りが一方的にならないようにしていくことが大事だと感じた。各学年で取り組むのではなく、系統をもたせて取り入れていくと、英語コミュニケーションが豊かになっていくのではないと考えた。</p> <p><テンポの良さについて></p> <p>40分という時間の中で、どの活動に重きを置くのかをしっかりと考え、授業を組み立てていくことが大事だと考えた。本時の授業では、アクティビティに10分時間と取り、子供たちが覚えた英語表現を使って、やり取りを楽しんでいたため、今後の授業構成の参考にしていきたい。</p> <p>○気付いたこと</p> <p>低学年ではジェスチャーの大切さを感じた。はっきり声が出なくても、コミュニケーションの始まりとなると思う。ジェスチャーを取り入れることで、声を出しやすくしたり、英語表現を覚えていなくても伝えたい言葉が伝わったりする。ジェスチャーと合わせながら、英語表現に親しませていきたい。</p>
3	校長 加藤久美子	汐見小学校	<p>① 笑顔にあふれた楽しい授業でした。</p> <p>② 「グッドコミュニケーションの4つのポイント」について、とてもよいタイミングで児童に意識させたことで、コミュニケーションの質が高まっていました。</p> <p>③ 投票箱やグラフなど、どの児童も意欲的に activitie に取り組めるしかけ（教材）が満載で、「一人でも多くの友達に声を掛けよう。」と夢中で活動していました。</p> <p>④ 「授業の始めにできなかつたことができるようになってうれしいです。」 「(友達とコミュニケーションをとった回数が)一番多かったのはぼくです。」インタビュー回数が分かるワークシートや、友達との関わりを振り返れる4つのポイントなど発達段階に即した工夫が多く、児童は互いのよさを認め合い、しっかりと振り返ることができました。</p>
4	主幹教諭 高橋 心	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の授業の内容が、子供たち一人一人の考え、活躍を大事にしたものであった。自分の考えが取り上げられ、最後に学級全体へと広がっていく展開が大変良かったと思う。学級の1位・2位・3位が決定する場面では、黒板を見る全員の目が輝いていた。 ・「hello」「help me」「me too」「good」等を大事にし、子供たち同士のコミュニケーションにつなげる意図が伝わってきた。今後も継続することで、子供たち一人一人が当たり前のように口にする言葉にしていきたい。 ・振り返りの時間が効果的であったと感じる。ワークシートで友達の良いところを記入させていた。意図的に相手意識を持たせた活動に対して、子供たちは、「～さんの声が大きくて良かった。」「～さんが○をくれた。」「～さ

			<p>んが英語で言えていた。」「～さんが、私に声を掛けてくれた。」「自分から、～さんに声を掛けられた。」という内容の振り返りが述べられていた。</p> <p>単に、「楽しかった。面白かった。またやりたい。」という内容ではなく、相手を意識させて振り返らせることで、友達とのコミュニケーションの場面をより鮮明に思い出すことができたようであった。1学年の段階からこのような振り返りを行い、次の学年でも継続して取り組むことで、子供たち一人一人が友達やALT、担任とのコミュニケーションを意識した活動につなげていくであろうと感じた。</p>
5	教諭 吉川真由子	汐見小学校	<p>児童の実態から、児童間でのコミュニケーションが少なかったため、今回は「グットコミュニケーション」として4つのポイント（認める・同意・繰り返し・助けを求める）を児童に伝えてから取り組んだので、ただインタビューで相手に聞いて終わりではなく、自然なコミュニケーションを促せたのがとても良かったです。また、分科会では、レベッカ先生から他の使える反応例（“I see.”や、“Excuse me?”など）も教わったので、取り入れていきたいと思いました。</p> <p>また、今回は振り返りの時間を多めにとれたので、児童は本時の学習についてしっかり振り返ることができていました。また、発表した児童の振り返りが、担任が求めていた反応例だったことからわかるように、本時の目標が達成できたからこそ出た振り返りだと感じました。</p> <p>同じ授業内容でも、授業のテンポがよく、児童がよく担任やALTの話をしっかり聞いていると感じました。普段の授業から話を聞くときの態度等の指導が行き届いているからこそだと感じました。大変勉強になりました。ありがとうございました。</p>
6	教諭 坂本 雅紀	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の始めに何をするのか、児童に明確に伝えていたことがよかった。 ○ALTの動物のジェスチャーが大きく特徴をよく捉えていたので、児童にとって分かりやすかった。下位群の児童にとって英語が分からなくてもそのジェスチャーで判断できた。 ○全体的にスピーディーな活動で児童に飽きさせないような工夫がされていた。 ○振り返りの時間を多くとったので、児童の関わりの様子が分かり、コミュニケーションがよくできたことの評価の材料にもなっていた。
7	教諭 鈴木 麻耶	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ○10種類以上の動物1つ1つに、かわいい動作がつけて楽しそうに元気よく発音していてとても良かったです。 ○レベッカ先生のテンポがよく、発音練習・メインのインタビュー・全体での確認とどれもしっかりと発話量があり、レベッカ先生の英語のシャワーの中で児童が活動していました。 ○振り返りも10分あり、友達のよかったところ、自分のよかったところ

			<p>などしっかりと自分自身で振り返り、さらに全体での発表もあってよかったです。</p> <p>○ 時間を気にして挙手での振り返りも多かったので、しっかりと書く日なども大事だなと思いました。</p>
8	課長 佐藤 浩明	町教育委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・無意識に、英語コミュニケーションを楽しんでいる姿が印象的であった。 ・インタビューゲームでは、繰り返し質問を発音し、答えも自分の考えで答え、言葉にすることで学びが深まると感じた。積極性も身に付き、小1から行うことは、大変有効だと思った。 ・参加型の授業で楽しかった。子供たちも飽きずに学べたので良かったと思う。
9	係長 稲妻 和久	町教育委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・子供たちが楽しんでいる様子でした。 ・1年生の段階では、コミュニケーションの力があると思った。それをキープしつつ、つないでいけると良いのかなと思いました。 ・感想を書かせるのに時間をかけすぎかなと感じました。それよりは、発語などにあてたほうがよいかと思いました。 ・先生が、満遍なく子供たちに声を掛けている感じが良いと感じました。 <p>※楽しませる、飽きさせない工夫をすることは、大変だと思います。英語コミュニケーションを通して、自分の頭で考え、自分の言葉で伝え合う力をつけてあげられるよう力を注いでいただけたらと思います。よろしくお願ひします。</p>
<p>【七ヶ浜町立汐見小学校】 授業Ⅳ 5年1組 Nathaniel Hazel Stuart (T1) 高橋 奈保子 (T2) 令和2年11月10日(火) 「I want to go to Italy?」</p>			
1	主幹教諭 折居 晃弘	松ヶ浜小学校	<p>アウトプット量を増やすためには、自信を付けることが肝要だと思いました。そのためには、何度も何度も同じパターンを繰り返すことが大切であり、気づいたら自然と口から出ていたというのが理想であると思う。また、テンポよく繰り返すことも大事である。テンポに乗るとアウトプットもしやすいし、楽しくアウトプットできるようになる。1年生からネイティブの英語を聞いていると、いつの間にか身に付き自然と口から出てくる。初めは、分からなくてもいい。何度も繰り返す中で自然と気づけばいい。自分が子どもの頃、セサミストリートという番組があった。ほぼ英語でストーリーが進んでいくが、分からないながらも、何となく理解できた。1回目で理解できなかったことも、2回、3回と見ていく内に、理解も深まっていったように感じている。英語コミュニケーション科もこれと似ているのではないかと、今回の授業や話し合いを通じて感じた。</p>
2	教諭 岸 美瑞保	松ヶ浜小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・単元の最終目標が「夢のクラス旅行の計画をたてる」ということで、本時のプレゼンテーションの必要性が明確で、それによって子どもたちは目的意識をもって学習に参加できていたのだと感じた。

			<ul style="list-style-type: none"> ・「can」の表現を使いながら、子どもたちは様々な表現を用いて国々の魅力を伝えていたことに高学年らしさを感じた。調べたり、練習したりすると小学生でも長いセンテンスを英語で伝えることができるのだと分かり、ぜひそのような力をつけさせたいと思った。自分の思いを伝えたり、友達の考えを感じ取らせたりするために、まずは単語、その次に定型文、そして最終的には自分の思いや考えを表現する、という段階まで達成させたいと思った。 ・子どもの発語量が確保されていると感じた。プレゼンテーションで1回、行きたい国の開票で1回というように、みんなの前で発言する機会が活動の中に組み込まれていたため、決まった人だけではなく全員参加しているという感じがした。また、同じパターンのやりとりをなんかもすることで、質問の声徐徐に自信をもった大きな声になっていった。ALTのネイティブの英語を聞き、たくさん発語することで、子どもたちのコミュニケーション力は上がっていくのだなと思った。 ・授業の最後の振り返りで、子どもたちが学んだことや、感じたことを積極的に挙手して発言していた。きちんと自分の本時の学びについて話せるということは、目的意識をもって授業に参加し、得たものがあつた授業だったからであると思った。自分も高学年を担当しているため、「楽しかった」で終わる授業ではなく、「こんなことができるようになった」「今日の授業で～ができてよかった」と思えるような授業を考えていきたいと思った。
3	教諭 清野 弘平	亦楽小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・5年生の授業を参観して、前時の活動と、後時の活動のつながりがすごくあると感じた。前時の調べ学習があつたため本時は高度なコミュニケーションができていて、後時の「旅行の計画を立てる」という単元の目標の達成があるので、本時は目的意識をもって学習に取り組むことができていた。高学年の学習では、コミュニケーション力の向上を目指す上で、「単元を通して付けたい力」を明確にし、単元構想を考えた指導が必要になってくると感じた。「明るく・楽しく・おもしろく」を目指す授業だけでなく、単元を貫く英語コミュニケーションがコミュニケーションの資質・能力の向上に必要であると強く感じた。 ・今回の授業は、「国際理解」という単元のテーマがあつたのではないかと感じた。それは、英語コミュニケーションで身に付けたい資質・能力の1つであると感じる。コミュニケーション力も大切であるが、様々な国の特色や考え方を理解しコミュニケーションをとることもこれからの社会では必要になってくると思う。「コミュニケーション力を高める」だけではなく、「国際理解」など、他の視点をもち英語コミュニケーションを進めていくことも必要ではないかを感じた。 ・授業を通して、「振り返り」について考えた。本時では、「楽しかったか」

			<p>などのT1からの問いかけであったが、例えば、「イギリスチームのどんなところが良かったのか」などの本時で身に付けたい資質・能力に対する振り返りの方が良かったのではないかと考える。そうすることで、「明るく・楽しく・おもしろい」だけの授業から脱却できるのではないかと考える。</p>
4	校長 加藤久美子	汐見小学校	<p>① 知的好奇心に基づく意欲の高まり、英語で表現することの楽しさ、友達の発表（プレゼン）を聞くことのおもしろさ、それぞれが伝わってくる授業でした。</p> <p>② 前時までの活動の中で出合った単語等は、本時の発表を経て、個々の児童にとって、忘れられない「言葉」となったと思います。</p> <p>③ プレゼンの間、質問への答えの間、そして投票での国名を読み上げている間、教室中から感動のため息、感心のため息、納得のため息が聞こえました。そのため息を、自然な形で英語に置き換えていくT1、T2のお二人の連携もすばらしかったです。</p> <p>④ 本時のように「発表」や「質問」が中心となる場合、児童が必要な「思考」をしているときに生まれる「間」を、T1がどう扱うか、どう声掛けをするか、今後の課題として考えていきたいと思っています。</p>
5	主幹教諭 高橋 心	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の授業の内容に、子供たちは興味を持っていた。自分の考えたことが、学級全体の考えに大きく関わっていくという展開に、ワクワクしながら授業に臨んでいた。 ・各グループの調べた内容は、高学年らしい知的な内容であった。本時に至るまでの調べ学習においては、ネイト先生と高橋奈先生と子供たち、そしてグループの仲間同士でのコミュニケーションが深められたことが想像できる。 ・グループ発表の際、発表者の視線、声の大きさ、相手意識を持たせることも、互いのコミュニケーションを図る上で大事な要因であると思う。このことは英語コミュニケーション科に限らず、他の教科においても大事にしていきたい。 ・グループの発表に対して、他のグループからの質問の時間を適宜設けることで、子供たち同士のコミュニケーションにつながれると感じた。分からない点や疑問に思ったことを質問するだけでも簡単なコミュニケーションとなるが、さらには「発表した友達はなぜ、そのことを紹介してくれたのかな。」と相手の内面にも踏み込んでいくことにつながるかもしれない。
6	教諭 文屋 優友	汐見小学校	<p>①子供の様子</p> <p>6月に比べると、だいぶ声が出てくるようになっていた。精度アップポイントにもあったように、しつこいくらい何度も同じ表現を繰り返すことで自信がついたことが大きな要因であると感じた。形式的に与えられた言</p>

			<p>葉をつかってとる「なんちゃってコミュニケーション」ではなく、前時に調べ学習を行ったこと、子供がなんのためにこの活動をするのかわかっていることから、自分の言葉でコミュニケーションをとろうとしている姿が見て取れた。</p> <p>②授業について</p> <p>①にも書いたように、高学年の英語は、低・中のような与えられた言葉で行うコミュニケーションではいけないと考えている。「目指す児童像は立てない」「せっかくのスパイラル学習」ということなので、しっかりと毎年積み上げられていないといけないと思う。「明るく・楽しく・面白い」アクティビティを行い、「楽しかったねー」で終わるのでは、高学年らしい思考はないし、5年分の積み重ねが見えないからである。本時は、児童の実態があったものの、「みんなで習った形式的な言葉」ではなく、「調べたことを伝えたい」という思いがあり、それを自分からネイティブ先生に聞いた英語で発表していた。ALT とのコミュニケーションの積み重ねや、単元のゴールを見据えた指導の結果だと感じた。</p> <p>③検討会から</p> <p>「英語Cに思考力・表現力を求めると子供の中の財産を損なう可能性がある」というご意見が印象的だった。</p>
7	教諭 今野 敬子	汐見小学校	<p>① 授業について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子供たちは、とても落ち着いて授業を受けており、6年生の授業づくりにも見習いたい点であると思いました。 ・相手意識をもった学習活動は、現在の授業づくりの大きな課題の一つでした。相手の思いに触れる、共感的に受け止める、受け止めた内容について暖かい反応を返すなど、日本語であっても英語であっても大事にしたい同じであるという前提を子供たちと共有し、日々の授業づくりを行っていきたくないと改めて考えさせられました。 ・発表会形式の授業では、情報の共有が難しい場合が多いですが、写真を準備してあり、難しい言葉と出会っても、飽きずに聞ける工夫が良かったと思います。その分、英語でのコミュニケーションというよりも、写真を通してのコミュニケーションになってしまうことも予想されました。だからこそ、投票後の結果の発表の際に、英語を書かせ、さらに偶然ひいた投票用紙を読ませたことが、英語に触れると同時に友達の思いにも触れることができたと思います。(選んだ理由等が書かれていればなお良いと思います)読むという言語活動が、英語でのコミュニケーションをより多様なものにさせ、高学年らしい言語活動だったと思います。
8	教頭 菊地 博明	向洋中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・七ヶ浜の英コミに限らず、小学校の英語の授業を初めて参観させていただいた。小5の授業では、もっとおどおどしながらの参加を予想していたが、

			<p>なかなかどうして落ち着いた参加ぶりであり、これまでの実践の成果を感じた。特に、最後の振り返りの場面で何名かの児童が挙手をして、授業の中での難しかった点や楽しかった点を発表した場面では、「どきどきしたけど、前に出てしっかり意見が言えた」等、子どもたちの素直な本音を聞くことができ良かった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本単元の主点で、国の名前や特色を知り、それをもって「行ってみたい国、クラス旅行」とつなげる構想であるが、子どもたちが調べた特色について、内容的に少し偏りがあるように感じた。「なぜ行ってみたい」という理由を見つけさせる上で、選択肢は多い方が良いと思う。生徒の発表の後、各国の特色についてオーソドックスなものを教師側から与えても良かったのではないか。 ・「繰り返し活動の中で飽きずに」といった点に留意されていたが、確かに繰り返し活動の中で少しずつ変化をつけることの難しさを感じた。それぞれの国の画像を見せて、関連する単語を出させてみるなどの活動を入れてみてはとも考えた。 ・ALT にしたがって繰り返し発音する活動では、ALT が手で拍子を取りながらリズムを大切に活動に取り組ませている様子が印象的だった。繰り返しの練習では、ALT に合わせて全員がもう少し元気よく発音できるとさらに良かった。 ・「行きたい国」を投票で決めた際には、子どもたちに大きな盛り上がりが見られたが、10分以上の時間をかけたことを考えると、もう一工夫あっても良かったと思う。 ・本校の英コミの授業を参観しても感じたことであるが、この形態の授業をしっかりと成り立たせるための大切な条件の一つとして、本時の指導案にもあるように「しっかり聞ける生徒」を育てることは重要であると感じた。
--	--	--	---

【七ヶ浜町立七ヶ浜中学校】 授業Ⅰ 2年2組 和田 朋子
令和2年11月13日(金) Let's Read The Carpenter's Gift (New Horizon English Course 2)

1	教諭 松川 昂	松ヶ浜小学校	<p>帯活動で「聞く」「読む」「話す」「書く」の活動が十分に盛り込まれており、それぞれの時間は短いものの、書いている英文や会話をしている様子を見ると、何回も何回も積み重ねたものであると感じました。特に印象に残っている場面はストーリーテリングの場面で、長文をすらすら書いている姿に驚きました。5分間集中して書いた後、何人かの子どもたちが「前より書けた！」と成長を実感している様子があり、とても良い瞬間だな、と感じました。わざわざ長い時間を一つの学習にあてるのではなく、毎時間何回も練習を積み重ねるのが大切であることを学びました。また、この帯活動が個人で取り組むだけで終わるのではなく、近くの友達と話し合っって取り組むことができる</p>
---	------------	--------	---

			<p>ことから、多くの児童が笑って楽しんでいました。</p> <p>Carpenter's Gift のリスニングでは、一回聞くだけではなく、何度も聞くことで徐々に物語の流れがつかめている子どもが多いように感じました。ただ文章を読み上げるのではなく、二人の先生が人形を用いて読むことで子どもたちは誰が話しているのかわかりやすくなっていたと思います。そして、誰が話しているのかわかることで会話の内容や話の流れを推測できるようになっていたと思います。同時に、先生方が楽しくやっていることで子どもたちも英語を聞こうという意欲が高まっているように感じました。ラウンドシステムの Round1 から意欲を高めることで Round を通して意欲を高く保って臨むことができると感じました。</p> <p>中学校の授業を見て、今日の2年生の姿は驚きの連続でした。自分の学年の子どもたちも未来の目指す姿を捉えながら指導していきたいと思います。</p>
2	教諭 三崎 恵理	松ヶ浜小学校	<p>1年生の内容をラウンドしている様子を見て、生徒たちが内容を覚えていて、自分でストーリーティングした事を書くことができていることにびっくりしました。昨年から続けているラウンドシステムの成果が表れていることが分かりました。さらに、初めて読む長い英文を読んで質問に答えている姿を見て、確実に力がついていることが分かりました。</p> <p>T1 と T2 の読む教科書の内容とピクチャーカードの絵を自分たちで言い合って並び替えるときは、だいたいの内容や絵の様子（空の色など）から生徒たちが選んでおり、今後の学習の手立てになっていると思いました。</p> <p>昨年度もこの学年の様子を参観させていただきました。何回も教科書の内容を読んだり、穴埋めをしたりしてだんだんレベルが上がっていくラウンドシステムでした。継続していることで今日の姿があることが分かりました。</p> <p>今日参観したクラスは、小学校6年の時担任した子どもたちだったのですが、同じクラスの他の子どもたちの英語の様子も見なかったです。特に、小学校でなかなか学習が身につかなかった子どもたちが、英語でどのように成長したのか、ラウンドシステムについていけているのか、知りたかったです。</p> <p>次回授業提供していただける時は、是非、同じクラスの2つの授業を同時に見せていただきたいと思います。</p>
3	教諭 二ツ森 進	亦楽小学校	<p>・授業の前半部分、帯活動として前学年の教科書を使った学習（ストーリーティング）を実施していた。教師の質問に答えながら話の内容を確認する場面では、それが質問であれば話の内容を答え、文章の練習であれば英文を唱えるといった流れが途切れることなく進んでいった。教師の発話の内容を生徒が即座に判断していて、英文をよく聞いていることが分かり驚いた。Unit 11の学習は今回で5回目とのことで、繰り返して取り組んできたことが英語での自然なやり取りを可能にしているのだろうと伺える。また、話の内容を英文で書いていく場面では、どの生徒も教科書や辞</p>

			<p>書を見ずに黙々と英単語を書き進めていた。ここでは、単語の正確さよりも語順を重視しているとのことだった。英単語を正確に覚えたり書けたりすることは確かに必要なことではあるが、英会話によるコミュニケーションの際には正確さにこだわるとそれが足枷になって上手く発話できなくなってしまうかもしれない。単語の曖昧さをお互いに許容しつつ、語順やジェスチャーなどの情報を加味して意思疎通を図っていくことができれば英会話は十分成り立っていくのではないだろうか。小学校の低学年ではまだだが、学年が上がって英単語を書く活動が入ってきたときに、児童ができるだけ苦手意識をもたないようにさせないといけない。そのためにも、英語を使えることが楽しいと児童に感じさせることができるよう、まず教師側が英語を楽しめる余裕をもつことが大切なのだろうと思う。</p> <p>・繰り返し学習（ラウンドシステム）で力の定着を図る上で、同内容をどの程度の扱いにするかは生徒の実態により変えていて、「飽きないけど、できた」という塩梅が難しいとのことだった。内容が簡単すぎても難しすぎても、学習に支障をきたすことになりかねない。最も避けたいのは、「飽きたし、できない」という状態であろうから、簡単な内容から積み上げつつも、負荷を与えすぎて生徒の達成感を損なわないように配慮することが肝心と言える。これは、語学学習に限ることではないと考える。</p>
4	教諭 小笠原恵子	亦楽小学校	<p>帯活動でのストーリーテリングが効果的だと思いました。指導案からは分からず、生徒の様子から推測したのですが、自分なりの言葉で説明したり、書いたりしていたので、アウトプットの力が付いていると思いました。</p> <p>ペープサートを用いて、会話を聞かせる場面では、より会話に近いやりとりだったので、普段のテキストとも違う文章に触れられる良さが合ったと思います。視覚的にも刺激的で集中しやすいものだったと思いました。</p> <p>学校をまたいで先生方の交流の様子分かりました。昨日の我が校の話し合いでも小学校も学校間で共有したいという意見が出たところでした。</p> <p>事後検討会では、当舎先生が「学年を超えてスパイラルのように復習を重ねていくこと、教師がロールモデルとなることが小中で共通している」と話し、小中のつながりについて考えるきっかけになりました。また、須藤校長から中学校での指導の在り方を意識して小学校での取り組みを考えていくことという新しい視点を得ることができました。</p>
5	教諭 當舎 聖美	亦楽小学校	<p>・帯活動では、中1教科書の内容のストーリーテリングを行っていました。昨年度の内容ですが、生徒たちはピクチャーカードを見ながら内容を思い出し、思い思いにリテリングしていました。書く活動では、勢いよく書いていたことに感動したのと、これがリテリングの力かと驚かされました。自分の言葉で英語をつかって表現するという楽しさを感じている様子が見て取れました。</p>

			<p>・小学校は、同じ単語や同じ文型をスパイラル的に学習していきます。その子どもたちのレベルや意欲、関係性によってその扱い方は異なりますが、ラウンドシステムでも同じようなことが行われていることが分かりました。小学校でも、高学年段階で、何度も繰り返してきたことを、「聞く→読む→話す→書く」という一連の流れで取り組むことができれば、スムーズにラウンドシステムに移行することができるのではないかと可能性を感じました。また、小学校段階で、ある程度の語彙力や会話力をつけて中学に上がることで、より、ラウンドシステムの効果が生きるのではないかと思いました。今後中学校での取り組みを参考にして、授業を構成していききたいと思います。</p>
6	教諭 熊谷 宏晃	汐見小学校	<p>聞く」「読む」「話す」「書く」の活動が取り入れられた授業であった。 人形を用いての授業は、内容を理解するのに効果的であったように思う。 授業の雰囲気楽しく学べるという雰囲気が伝わってきた。</p>
7	教諭 坂本 雅紀	汐見小学校	<p><u>視点②ラウンドシステムの中に、学力保証の時間をどのように位置づけていくか</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ストーリーテリングにおいて、書く活動を上手に取り入れていた。生徒もしっかりと書いていたのは素晴らしい。 ○「会話やコミュニケーション」、「生徒のモデルとなり、生の英語を聞かせるということ」の点において、TTの必要性があったとの説明があった。 ○「帯活動で25分間、展開の時間を18分間とっているが進度は大丈夫か」という質問に対して、他の時間で調整したりしており計画通り進めているとのことであった。 ○生徒の実態を基にラウンドシステムを考えていることが分かった。素晴らしい授業、生徒の積極的な学びの様子を見ることができ、非常に参考になりました。
8	教諭 村山 貴彦	七ヶ浜中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・1時間の授業のなかでどんどん英語を聞き、英語を話し、英語を読む時間が確保されていました。 ・生徒が聞いた英語の内容理解力、読んだことを理解する力などすごく訓練されていると思いました。 ・英語が苦手な生徒も単語を聞き取ろうと努めていました。 ・英文を書く時間も、自分の頭で考えた文を正確に、早く書けることに驚きました。 ・読む時間、書く時間、聞く時間、話す時間などメリハリのある授業だったと思います。 ・読みトレを読んだあと内容をどれくらい理解しているのか確認する時間や読みトレに関する問題がいくつかあってもよいのではと思いました。

【七ヶ浜町立七ヶ浜中学校】 授業Ⅱ 3年3組 藤村 崇 令和2年11月13日(金) Let's Read 1 "A Mother's Lullaby" (New Horizon English Course 3)			
1	教諭 鈴木 洋	松ヶ浜小学校	<p>・参観させていただき、とても参考になったことが「授業のテンポの良さ」です。T1とT2のスピーディーな話にしっかり付いていく子どもたちが印象に残りました。</p> <p>新出語句の確認も、T1に続く生徒の発音がこぎみよく、生徒も飽きずに集中して学習に取り組めていました。</p> <p>ペアでの単語の意味確認や、読みトレに取り組む姿も楽しそうにやれていたの、子どもたちが英語を楽しんでいる感じが伝わってきました。</p> <p>今回の参観を通して感じたことは、良い授業を作るためには、①子どもの実態を把握すること、②それに応じた教師の準備です。</p> <p>子どもたちがどこまで理解できるか、どこまで理解できそうかを予め教師側が予測することが大事で、それに合わせた教材や問題の設定があり、はじめて子どもが生き生きと活動できるのだと感じました。</p> <p>ありがとうございました。</p>
2	教頭 高松 祐士	亦楽小学校	<p>・読みトレは積み重ねを感じるものでした。短時間の黙読で内容をほとんどの生徒が理解している様子が窺えました。リーディングの力を身につけるためには有効であると感じました。</p> <p>・子供達の発話量をもっとほしいと感じました。リーディングやリスニングに比べ、声に出してコミュニケーションをとっている時間がたりないのではとおもいました。理解できている生徒が多いようなので、生徒間でもっとやりとりをしても面白い授業になるのではと感じました。</p>
3	教諭 當舎 聖美	亦楽小学校	<p>・1時間、英語に浸っているなと感じました。授業の初め、ニュースを流して、耳から入る英語の音声は本物の英語です。他言語のイントネーションやアクセントは、日本語を母語としている私たちには感じにくいものです。自然に耳に入る本物の英語が、話すことへの興味関心へ繋がる可能性を感じました。</p> <p>・読みトレという冊子をつかって、短時間で内容を理解し、問いかけに対する答えを探す様子は、訓練の賜物だと思いました。何度も繰り返していくことの大切さを感じました。</p> <p>・あのくらい内容理解が速い子たちなので、質問や答えのやり取りを、生徒間でさせるのも面白いかなと思いました。この時間の目標ではないかもしれませんが、生徒たちの表現する姿を見たいです。</p>
4	主幹教諭 高橋 心	汐見小学校	<p>・休み時間から外国の映像を見せて、英語に自然と触れさせる。授業では、ハロウィンに関する映像で生徒をリラックスさせながら、生徒同士に楽に</p>

			<p>質問させる。など、互いにコミュニケーションを取りやすくする工夫が随所に見られました。生徒達も終始笑顔で学習に臨んでいました。そして、楽しい授業で終わるのではなく、音読、単語の練習、本文の聞き取りなどの学習活動において、生徒達がメリハリをつけて学習していることが感じられました。本時の評価の一つである「意欲的なやりとり」が十分達成されていたと感じました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ T 2 の役割も参考になりました。T 1 とのデモンストレーションでコミュニケーションのやりとりを例示し、さらに、6 .Listening の Tor F の場面では、後藤先生は生徒達に聞いて回り、生徒達の理解度に応じて積極的にアドバイスをしていました。T 1 T 2 の連携によって、評価内容である「本文の概要を捉える」が達成されていたと感じました。小学校でも、T 1 の A L T、T 2 の担任との連携が授業に大きく影響しています。1 単位時間の目標の達成に向けて、授業の中の各活動における T 2 の役割を明確にすることの大切さを改めて認識しました。 ・ 中学校のラウンドシステムの取組を、小学校へフィードバックするという話が提案されました。授業の雰囲気づくり、本時の授業構成、T 1 T 2 の連携など、今後、参考にさせていただく内容が多くありました。特に、小学校高学年の授業では必要な内容だと思います。授業後の話合いの場は、中学校のラウンドシステム・小学校英語コミュニケーション科の情報共有の場として大変有意義でした。
5	教諭 吉川真由子	汐見小学校	<p>参観させていただき、ありがとうございました。中学校の先生からしたら当たり前かもしれませんが、小学校の担任として中学校の英語の授業を参観させていただいて、率直に「子どもたちすごいな！」と感じました。あれだけたくさん単語や長文を聞いたり、話したりできることに感動しました。普段の授業の積み重ねがあのような子どもたちの育成につながっていることに感動しました。</p> <p>帯活動の「読みトレ」は大変興味深い活動でした。上位の子どもたちにとっては、教科書以外の文章を読むことで確実にスキルアップになると思いますし、下位の子たちにとっては、長文に対する耐性がつくと思いました。また、単語練習も「聞く・話す・友達と問題を出し合う」などバリエーション豊かに練習されていて、飽きずに繰り返し練習できていることに、感心しました。小学校の授業でも取り入れていきたいです。また、その単語練習が後半の展開に生きていて、T or F でセンテンス全部を聞き取れなくても、単語を拾えることで、正答できている生徒が数名見られました。</p> <p>大変勉強になりました。ありがとうございました。</p>
6	教諭 半澤 律子	向洋中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業前の休み時間には、アメリカ大統領選挙に関するアメリカのニュース番組が流れており、生徒が自然に異文化へ触れることのできる機会が意図的

			<p>に作られていた。英語を母国語とする人々の異文化に触れることは、生徒の英語学習への興味・関心を引き出きだしていく場面のひとつである。生徒達が幅広く様々な異文化に触れ、英語学習への興味・関心をより喚起していくよう、私自身の英語の授業においても、本文の内容の導入や帯活動において取り入れていきたいと感じた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・PCの並べかえも素早く、また、T or F のにも的確に解答しており、生徒の理解力の高さを感じた。さて、今回の指導案の本時の目標には、「ストーリーの概要を捉えることができる」、評価基準には「本文の概要をピクチャーカードの並べ替えをすることで理解することができる【外国語理解の能力】」と記載されている。ただ、本時の指導の【外国語理解の能力】の評価の場面は、T or F の場面となっており、整合性について疑問を感じた。「概要を捉える」とは、「内容に一貫性のある英語を最初から最後まで聞き、1語1語や1文1文の意味になど特定の部分にのみにとらわれたりすることなく、全体としてどのような話のあらましになっているのか捉えること」である。そのことから考えると、T or F は目標達成のために有効的だったのか疑問が残る。今回の授業ではPCの並びかえの場面よりも、Tor F の場面に重点を置いているように感じた。 ・3学年では、習熟度別の少人数指導を実施している。この時、「話の概要を捉える」という目標に対して、それぞれのクラスが生徒の実態に応じて、どのように目標に迫っているのか、比較検討することで、少人数指導でのラウンドシステムの有効性を検証することが出来るのではないかと考える。次回、公開授業がある際には、少人数指導両クラスの授業を是非参観させていただきたい。
<p>【七ヶ浜町立向洋中学校】 授業 I 1年1組 氏家 美香 令和2年11月9日(月) Unit 8 イギリスの本 (NEW HORIZON English Course 1)</p>			
1	<p>教頭 新田 聡</p>	<p>松ヶ浜小学校</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「生徒の笑顔」「途切れることなく聞こえる英語」に満ち溢れた授業だった。 ・One minute talk での「アバター」を使った対話では、response の具体例を示しながら、1往復、2往復の対話を楽しむ状況を作り出していた。 ・個別支援においてもタイミングを計りながら生徒からの発話を引き出す質問や励ましが行われていた。 ・いずれも生徒自身が、小学校での英コミで取り組んできた経験を5ラウンド上でスムーズに、さらに効果的な学びの素地として生かすことができる授業構成になっており、communication tool としての英語を楽しみながら学ぶ姿がはっきり見えた授業であった。この意味で、「英語コミュニケーション」→「七ヶ浜5ラウンドシステム」の系統性の確かさを確認することができた。

2	教諭 瀬戸口 眸	松ヶ浜小学校	<p>ラウンドシステムについて実際に授業を見たことで具体的に知ることができてよかった。とにかくたくさん話し、コミュニケーションをとっているところが素晴らしかった。相手意識を常に持たせた授業展開ができていた。リスニングでは、バリエーションを提示しながら、飽きずに取り組みさせているところがよかった。一言一句理解させるのではなく、全体を通してなんとなく分かるという感じなので、子どもたち全員が間違いを恐れずに取り組んでいるのがよかった。</p> <p>たくさん英語を聞き、たくさん話をする機会を作ることが大切だと感じた。</p>
3	教諭 香取 幸貴	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校よりもシステム化されていて、3年間繰り返し学習できるので、確実に力が付くと感じた。 ・ラウンドシステムの内容を聞いて、最後に相手に伝えるというゴールがあるので、意欲を持って取り組めるのではないかと思った。 ・単語のワードリストを繰り返し学習しており、下位層の生徒も単語を英語で言うことができていたのに驚いた。英語は技術科目だと聞いたことがあるが、コミュニケーションだけではなく、トレーニングすることも大切だと思った。 ・中学校でも小学校のようにテンション高く活動できていた。小学校からの良い流れができていないかと感じた。
4	教諭 千葉 梢	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・ small talk ペアで交流させる前に、レスポンスの語彙を提示している点がとても良いと思いました。コミュニケーションは、話す、聞くだけで終わりではなく、会話を展開していくものだと思うので、レスポンスの語彙を使うことで、本来のコミュニケーションの形に近い練習となっていると思いました。 レスポンスの語彙を提示しての small talk は自分の授業でも、是非取り入れたいと思います。 ・ Listening 初任者研修の事務所研修で、七ヶ浜5 ラウンドシステムの Listening を体験し、情報がない状態で本文を聞き取ることの難しさを感じました。体験したことを6月時点での生徒の姿として考え、ラウンドシステムの授業を積み重ねていくとどのような生徒の姿が見られるのか、という視点で参観させていただきました。 全体を聞こうとするのではなく、単語を聞き取ろうとする生徒の姿から、学習の積み重ねの中で、キーワードをもとに本文の概要を掴んだり、内容を推測したりする力を身につけているのだと感じました。 聞き取れた単語や文を書き出させたり、全員に発表をさせたりすることで、

			<p>聞く際に少しでも聞き取ろうとする意欲を持たせることができていると思います。</p> <p>中学校での英語科の授業を参観し、小学校での英語コミュニケーションの授業を通して、自分のことを伝えたい気持ち、相手のことを聞きたい気持ちを育てていくことが大切だと分かりました。目指す姿として生徒の姿を見ることができ、自らの英語コミュニケーションの授業を顧みることができました。</p>
<p>【七ヶ浜町立向洋中学校】 授業Ⅱ 3年3組 半澤 律子 (T1) 大橋 智江 (T2)</p> <p>令和2年11月9日(月) Unit 4 To Our Future Generations (NEW HORIZON English Course 3)</p>			
1	<p>教頭 新田 聡</p>	<p>松ヶ浜小学校</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・中学3年生は小学6年生で英Cを始めた学年に当たる。今回は Retelling の最終段階の授業であった。とても規律正しい生徒、クラスと感じた。 ・両先生の授業はいつも、全体への指示はもちろん、生徒との対話の「流れ」がスムーズで、まるでひと続きの物語のように感じる。 ・これまでに身に付けた「聴く力」が、グループ内での共有場面で生かされている様子を確認できたが、その後の抽出発表で見られたように、やや消極的な生徒もいるように感じた。留意点にある生徒同士での称賛が自然に出せることも含めた積極性を高めることにより、さらに input と output の連動性も高まることを期待したい。 ・Writing では、自分の考えを確認しながら表現することが求められていたと思うが、清書に終始していた生徒が多かったように感じたので、そうであれば振り返りでの共有、communication の時間を優先する方法もあるかと思った。
2	<p>教諭 高橋 和幸</p>	<p>松ヶ浜小学校</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・元気が良く、雰囲気の良い授業で、見ている方も楽しく参観させていただきました。何事においてもシステムチックで驚きました。私自身がもう一度中学校で学びたくなった授業でした。 ・情報を与えずにまず聞かせて児童の気付きに寄り添う工夫にも関心しました。(その場面をどう想像したのか、どのような言葉に注目したのか等) ・ラウンドシステムの授業を初めて参観し、中学校での系統的な学びに圧倒させると同時にそのレベルまで上げるために小学校でできることは何かを考えるきっかけになりました。特に、リテリングに興味をもちました。ラウンド4・5での習った文法だけでなく、それに加えて自分の考えを別の単語や文章を構成して述べる中3の生徒たちを見て、大変触発されました。私自身も英検を再検討したいほど学習意欲が高まりました。 ・ラウンドシステムの良さは、繰り返される入力と出力の作業だと聞きました。本文から自分の言いたい文を引用した場合、それを再度思い出し、扱ってみる時間を意図的に設けることでその良さが発揮されるかなと感じました。また、自分自身の授業についても振り返るよい機会になりました。

			た。本当にありがとうございました。
3	教諭 今野 敬子	汐見小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度、授業を参観させていただいたときは、ラウンドシステムを始めたばかりの時期であり、先生方も手探りの中、授業を進められていた。 ・ペアが変わり、発表の回数を重ねていくうちに、友達の表現のまねをしたり、説明の観点を見つけたりするなど、表現の幅が広がっていく様子を見ることができて、ラウンドシステムの良さを実感することができた。 ・今年度は、その次の段階で、それまでの授業で作成したまとまりのある内容の文章を発表するという授業であった。生徒は、クラス全員の前で発表することを前提として学びを重ねているので、「相手意識」をもって学習に取り組んでいることが分かった。写真資料の示し方や、教科書の文章の活用の仕方などこの一年間での学びの跡が感じられた。 ・授業者の先生方は、「教科書の内容を説明すると、教科書で使われている言い回しや文法等を用いがちになってしまう」と自評で話されていたが、昨年度の授業記録を見ると、「写真の中に見えたものを何でも説明して良い」「まずは、見えたことを文章にしてみよう」と指示をされていたので、教科書の内容に沿った洗練された内容で生徒が説明できるようになってきているゆえの課題であると思った。そして、教科書の文法を用いたからこそ、聞いている生徒達も聞いていて内容を共有しやすいのではないかと考えた。 ・全体への発表を聞いている際に、生徒から「お～」と歓声が上がっていて、初めて聞いて内容を理解している様子がうかがえた。その歓声が内容についてなのか、文法や言い回しについてなのか教師側から聞いて見たり、発表後のコメントを言わせたりするなど、発表活動の内容がさらに充実すると思った。
4	教諭 小野 裕太	七ヶ浜中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・どの生徒も臆することなく、教科書のピクチャーカードを見て、リテリングをできていた。前時まで積み重ねと原稿チェックを細かく行っている成果だと感じた。 ・個人→ペア→グループでリテリングを行うなど、学習形態の工夫が授業中に多くあり、生徒が飽きずに活動できていた。また他の生徒のリテリング文を聞く機会も多くあり、自分のリテリングの文章にそれを生かしている生徒が多くいたのもとてもよかったと感じた。 ・一回一回リテリングする時間を多くとっていたのが生徒にとってはとても有効だったと思う。お互いの文章を比べながら活動している生徒が多くいた。 ・最後に全体の前でリテリングした文章を発表しあう場面があり、お互いの頑張りを認め合いながらも、更にレベルの高いリテリングにしようという意識が出てきたのではないかと感じた。

			<ul style="list-style-type: none"> ・どうしても手元にメモがあると、メモに頼ってしまう生徒が多くいたので、メモに頼らず、表現するにはどうすればよいか考えなければならぬと感じた。
5	教諭 鈴木 美夏	七ヶ浜中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・元気が良く、雰囲気の良い授業で、見ている方も楽しく参観させていただきました。テンポの良い指示に、生徒の活動も止まることなくスムーズに流れていました。 ・先生と生徒と一緒に目標を確認する場面がありました。目標を明確にすることで、一生懸命に音読に取り組む生徒の姿が見られました。 ・ペアでアドバイスする場面がありました。ペアの人の情報と違うところがあったら○を付けて、自分の表現を増やす、という指示がありましたが、あるペアはどちらもほぼ同じ文章でした。どうするのかな、と見ていたところ、「同じだよ、じゃあ全部○を付けよっか」「そうだね」と2人で相談していました。相手の選んだ文も自分の選んだ文も、どちらも価値がある、という選択をしたことに、コミュニケーション活動の積み重ねが根底にあるのではないかと感じ、とても温かい気持ちになりました。 ・ラウンドシステムの良さは、繰り返される入力と出力の作業だと思いません。本文から自分の言いたい文を引用した場合、それを再度思い出し、扱ってみる時間を意図的に設けることでその良さが発揮されるのではないかと、思います。今日の授業では入力の部分を見せていただきました。また、自分の言いたい文、というくくりにして自分事に少しでも近づけていることが参考になりました。入力の後の出力の部分の工夫をどのようにしたら良いか、自分自身の授業についても振り返ったいい機会になりました。